

水

色

眼

鏡

# ACE



## エースクラージーン



## ジェヴォーダンの獣

# GENE



女よ、女

武装した女よ

武装した女たちよ

武装した女に気をつけろ、気をつけろ

皆、そこら中で叫んでいる

女たちよ、銃を持てと

鋼の鎧とともに

心の牙とともに

武装した女よ

\*この物語はフィクションです。実在の人物・場所・事件とはいかなる関係もありません。

\*この物語はファイイースト・アミューズメント・リサーチ社の『バトルガールプロデュースRPGエーススライジーン』および『バディアクションRPGガーデンオーダー』の世界観を基にした二次創作小説です。

\*この物語は原作と異なる部分があります。

\*原作の著作権は、遠藤卓司とF・E・A・R社が所有しています。

■お詫びとご注意…目次の項目をタップするとその章へ飛べますが、一部に目標とは違う章へ飛ぶ場合がございます。その際は章のタイトルをタップして目次へ戻して下さい。

● 目次

- ・ プロローグ
- ・ 銀行襲撃
- ・ レッドサキユバス
- ・ ル・パス
- ・ 公安7課
- ・ パイドパイパー
- ・ 社会見学
- ・ マノス・デ・グロリア
- ・ メテオウィルス
- ・ クラウンカンパニー

- ・ ジェヴォーダンの獣
- ・ 傭兵たち
- ・ 免疫者
- ・ 咲良女学園
- ・ 作戦会議
- ・ 作戦準備
- ・ 決行
- ・ 邂逅
- ・ 潜伏
- ・ 決戦
- ・ エピローグ
- ・ あとがき



MIKAMI KYOUKA

## 三上京香

「大丈夫です。わたしが、守ります」

age: 13

真面目で勇敢なアタッカー。

若年ながらエースキラーの経験は誰よりも豊富。リーダーののり子がスナイパーなので事実上現場指揮官。常に冷静で的確な戦術を執る。甘い物に目がない。



MOTOI NORIKO

## 本衣のり子

「…んで、いくら出すって？」

age: 18

売れないアイドルグループ「レッドサキュバス」のリーダー。

皮肉屋で現金な性格で、戦いを一種のスポーツのように見なしている。スナイパーとしての腕前は達人級で数キロ先の人の頭を撃ち抜ける。仲間を家族のように思っている。

AIZAWA MISAO  
**相沢みさお**

「うっわ、こんなんあり!？」

age: 15

チームのサポーター役&爆発物専門。  
高校デビューを飾ろうとする直前  
怪異に襲われエースキラーになる。  
常人離れた力と体を持つが  
自分では普通の間人だと思ってる。  
愛嬌のある顔立ちのせいで  
みんなからよくいじられる。  
コンビニ限定グッズやガチャ好き。



TOKIWA TOMOE

**常盤巴**

「ノブレスオブリージュは我が掟」

age: 16

エースキラーになる以前から古来  
より伝わる常盤流武術の遣い手。  
自身の能力は力なき人々を救うためと  
心得ている。  
氷属性を持ち、伶俐な微笑みとともに  
悪を断つ。  
その美貌ゆえ女学生や女教師からも  
慕われている。  
時々、時代錯誤な発言をする。

MARIE MATMOUR

# マリー・マトムール

「Êtes-vous d'accord.」

age: 14

国籍不明の謎の少女。

喜怒哀楽の表情に乏しく何を考えているのかわからない。

いつの間にか日本へ流れ着いてエースキラーになっていた。

普段はフランス語を喋る癖があるが日本語だけでなく十数ヶ国語を流暢に話せる。

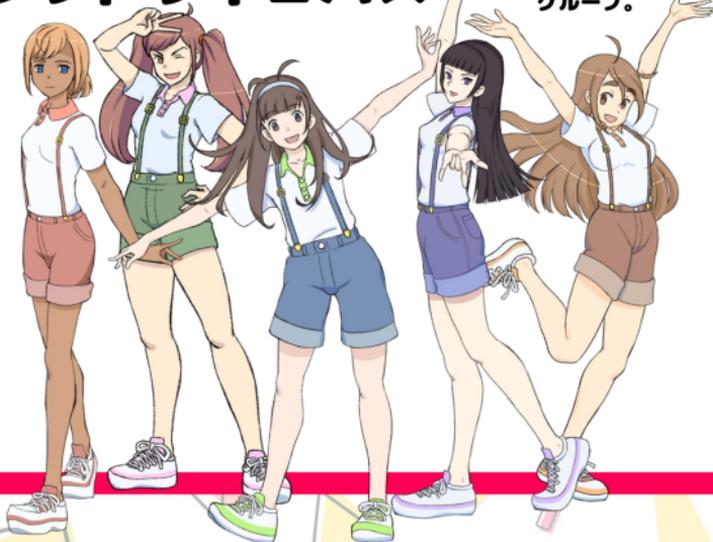
野菜作りと小動物が好き。



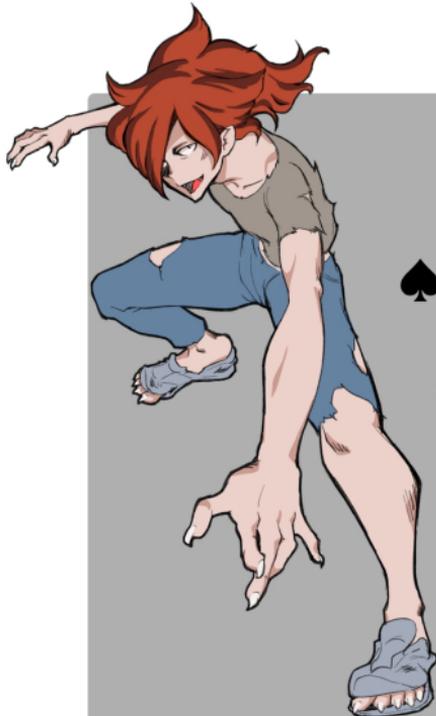
Red Succubus

# レッドサクキュバス

売れない  
地底アイドル  
グループ。



# VILLAINS



きたに てんろう

## ♠ 奇谷天狼

ウェアウルフ

人狼型エース。通称『ジェヴォーダンの獣』  
三度の飯より殺し合いと人肉が好き



## ♠ ル・パス

超能力者型エース。  
通称『壁抜け男』  
物体透過の能力を持つが  
戦闘力は低い。  
事情があって仕方なく  
天狼を支援する



## ♠ パイドパイパー

事件の首謀者。通称『笛吹き男』  
天狼やル・パスを操って大きな事件を  
起こそうとしている



あいば りょう

## ♣相庭遼

京香たちエースキラーを  
サポートする天才ハッカー。  
電子技術を駆使して情報  
収集と攪乱戦法を担う。  
通称『電子の魔術師』

# PRODUCER



ためま おきつぐ

## ♣田沼沖次

京香たち『レッドサキュバス』を  
引率するマネージャー。  
口八丁手八丁の交渉術が得意。  
通称『スネークタン（蛇の舌）』



かわしま

## ♣川島アヤメ

アシスタント・  
マネージャー。  
『レッドサキュ  
バス』の仕事を取ってくるのが  
役目。  
美少女に目がない  
ミーハー。



あさい ぎいちろう

## ♣浅井義一郎

『レッドサキュバス』の  
所属する会社『クラウン  
カンパニー』のCEO。  
その裏の顔はエースを  
抹殺する組織『百人会』  
とつながりを持つ。

# SUPPORTER



## ♥エルザ・フォッカー

エースキラーを支援する『アルタイル総合研究所』の主任研究者。人類の敵である異形『ネフィリム』と人型異形『エース』を葬るために日夜研究に没頭している。通称『ザ・コック』



## ♥アヴェ・マリア

エースキラーを支援する秘密組織『百人会』の頭目の一人。巨大財閥の娘で巨額の資金提供をしている。『アヴェ・マリア』は通称で本名は明かさない。エース討伐に執念を燃やす



とうとう みつる

## ♥藤堂光流

エースキラーを戦闘面で支援する軍事プロデューサー。常に冷酷なほど沈着冷静。作戦立案と戦術指導を行う司令官（コマンダー）



あさか なみこ

## ♥朝霞波子

若干16歳のネットアイドル。高校を中退した引きこもり型オタク。SNSやネット配信で稼いでいる。ネットラジオの『ミッドナイトレディオ』で都市伝説やマイナーな話題を拾いつつエースの情報収集をしている。『レッドサキュバス』をゲストに招く

# PERSONS



やざわ ともや

## ◆ 矢沢友也

元警視庁捜査第一課のエリート刑事。  
ある事件で左遷され  
公安7課へ飛ばされた。  
エースやエースキラー  
の存在を信じていない。



おおのべ たいちろう

## ◆ 大延太郎

公安の秘密捜査を担う  
公安7課のベテラン刑事。  
京香たちエースキラーに  
協力している。  
ヘビースモーカー



みたか こうだい

## ◆ 見鷹広大

人間以外ならなんでも  
買い取る古物商。  
本職は情報屋。  
大延たちにネタを売って  
いる

## ◆ コスタス・ファルケス

引退した伝説の傭兵隊長。  
冷酷な手腕で有名な凄腕



## ◆ ドン・ホセ

メキシコ系カルテルの大ボス。  
日本で武器密輸や人身売買  
などあらゆる犯罪に手を染め  
ている



1999年7月。

空から【恐怖の大王】が降臨した。

それは、

宇宙人でも、

悪魔でも、

怪獣でも、

ハルマゲドンでもなかった。

それは、隕石に付着していた微生物ウィルスだった。

ほんのひとつまみのそれが、人類と地球を根本から変えていった。

暗黒の空間に浮かぶ青い球体の表面に、いくつものオレンジ色の光点が広がり、やがて赤々とした光と混ざり合って、不吉で巨大な華々を開放させてゆく。

それからゆつくりと光が消え、地球は暗闇に包まれた。

…再び明かりが灯った時、人類は二度と後戻りの出来ない未来へ歩み始めたのだった……

【エースキラージーン ジェヴオーダンの獣】

●プロローグ

狙撃望遠鏡スコープの円形の視界の中で、動きがあつた。

映っているのはガレージ付きビルの玄関だ。

深夜、街灯から離れた所に、ポツンと建っている。

半地下式の部分にガレージがあり、今はシャッターが降りていた。

玄関はシャッターの脇の短い階段を上がったところにある。

ビルの窓はどれもカーテンが掛かり、明かりは見えない。

建物自体も壁に薄いヒビが蜘蛛の巣のように走っている。

誰かが住んでいるようには思えない。

そのドアが、開いた。

玄関前のポーチに黒い人影が立っていた。

肉眼ならはつきりとは見えない。

しかし、スコープの緑色の視界の中では、その人間の特徴がはつきりと分かった。

「こちらサキュバスワン。

玄関から男性1名。身長175センチ、体重約70キロ、浅黒い肌、スラ  
グ系の顔立ち。頬髭と顎髭。黒い革ジャンにジーンズ、腰に拳銃を隠してい  
る。玄関ポーチで通りを見張ってる」

少女の声が、出てきた人物の特徴をつぶやいた。

耳を覆っているヘッドホンから複数の応答が響く。

△こちらマジシャン、こつちも捉えた。それ以上は出てこない▽

△こちら司令官、まだ動くな。例の車が着いて中身を確認してからだ▽

「了解」

少女は、覗いているビルから遠く離れた、廃ビルに居た。

商業施設に挟まれ、いつの間にか利用されなくなった雑居ビルだ。1階入口の脇に「テナント募集」の色褪せた張り紙がある。

広い駐車場に囲まれていて、見通しはいい。

周辺地帯は寂れた商業区で、客足は郊外の大型ショッピングモールに獲られていた。まだ営業中の小売店と廃業した店がマダラ模様になっている。そ

の裏手は小さな倉庫や工事用の資材置き場やレンタルのショベルカーが並んでいた。

ようするにひと気がない。

ましてや真夜中。

その廃ビルの屋上にいる。

バカでかい看板を付けた高いフェンスの下から、眼下を見下ろしていた。

少女は膝立ちの姿勢で座っていた。

ほんのわずか首を回して左右を見渡す以外、仏像のように動かさず、長い銃を構えている。

スナイパーライフル  
狙撃銃

長い銃身の先に、さらに長い筒状の減音器サプレッサーを装着していた。大きな単眼式のスコープが本体の上に鎮座している。「ハ」の字型の支持脚パイポッドを屋上の縁に置き、下を覗いていた。

一応、狙撃手の格好をしているとはいえ、見てくれは遊びにしか見えな  
い。

サバイバルゲームのようだ。

狙撃銃はパステルカラーのピンクとグレーに塗り分けられていた。

ご丁寧にかわいい動物のシールまで貼っている。

そして、銃を操る当人はというと、女子高生そのもの。



開襟シャツに膝丈のギャザースカート、ローファーの靴。太股の上まで黒タイツを穿き、長い髪をツインテールに分けている。

だがその上からタクティカルベストを羽織り、ニーパッドを着け、喉頭マイク付きヘッドセットを被っている。とどめは腰に巻いたタクティカルベルトと拳銃の入ったホルスター。

『サキュバスワン』と名乗る少女は、その態勢でさつきからガムを噛みながら待機していた。

「サキュバスワンからスネークタンへ。まだ対象は来ないの？」

△こちらスネークタン、予定では20分以内に到着するよ▽

「はいはい、ごゆつくり。こっちはお尻冷えちゃうけど」

△こちらコマンダー。サキュバスワン、私語を慎め▽

「あいあい、コマンダー。コピーコピー」

投げやりに言いつつ、照準線の中に玄関前の男を捉えている。

スコープの視界には細い十字線が走り、細かく区切られていた。数字が書かれていた。

(…距離150、無風状態。外しようがないな)

いつでも撃てる態勢を維持しながら、人差し指は引き金に触れていない。撃つ瞬間までは絶対に触れない。

\*

少女から投げやりな応えを受けた司令官は、コマンドアイ薄暗い部屋の中に居た。骸骨のような男だ。

背が高く、ひどく痩せていて、青白く、頬がこけている。

顔つきからするとまだ30歳になるかならないかくらいだが、倍の年齢はあるような痩せぶりだった。

それでいて眼は異様なまでに鋭く、全身からジワジワと精気を発している。

この奇妙な生命力を持った男を初めて見る者は、病人のような外見と滲み出る圧力のチグハグさにギョツとするだろう。ゾンビかミイラが動いているようだ。

男は先ほどから背筋を伸ばしたまま正面のモニターを眺めていた。

その部屋には何台もの大型モニターがあり、リアルタイムで状況を知らせてくる。幾人かのオペレーターが端末を操作し、司令官へ状況を告げていた。



「<sup>ターゲット</sup>対象の動きを確認しました。『倉庫』へのルートを辿っています。10分以内に到着すると思われます」

オペレーターの一人が報告する。

「サキュバスファイブは同乗しているのか」

「シグナルが発信されています」

モニターに表示されたマップの中で、対象となる四角いアイコンが動き、その中から赤い信号が瞬<sup>またた</sup>いていた。

「コマンダーからマジシャンへ。敵の監視網はどうなっている」

\*

司令官から問われたマジシャンが答える。

「こちらマジシャン。ばっちり対人レーダーで囲ってる。近づけばすぐに気づかれる」

へそちらからハッキングできないか？

「あいにくあつちの操作はスタンドアローンだ。内部からネットに繋がつながないと、こちらは何も出来ない」

そこは狭い部屋だった。青い光に染まった室内には、小型モニターやパソコンのタワーがぎっしり詰まり、太いケーブルで繋がっている。

高価なゲーミングチェアに腰掛けたマジシャンは、ツンツンととんがった癖毛の、アニメキャラを刷ったTシャツを着た、大学生くらいの男だった。

大きなヘッドフォンを被り、ゲームパッドとキーボードを両手で器用に操るさまは、本当にゲームをしているように見える。

マジシャンの周囲には小型モニターが半円形に囲っており、現場近くの防犯カメラをハッキングした映像が多数流れていた。加えて、上空でホバリングしているドローンからビルの上が映されている。

「こちらサキュバスワン。ドローンにやらせればいいじゃないの。接近してジャミングとかさ」

「こちらマジシャン、無茶言うな。いくらステルス型だって、近づき過ぎればアウトだ」

「オーライ、ようするに手も足も出ないってこと。裏口はあんの？」

「裏口はないが3階の北側にバルコニーがある。そこから避難梯子で降りるって手もある」

「こっちは南。そっちは見えないよ」

「心配するな。ドローンで見張ってる」

△よし。今のうちにもう一度作戦概要を確かめる▽

司令官が言った。

△今回の作戦の目的は誘拐された人質の救出だ。

この日本の関東で集められた、非合法組織の『商品』となる女性たちを救う。

組織の実態は、広域暴力団に支援された海外系のギャング。最近増えている、白人・黒人・赤人・黄人、人種を問わない国際的な犯罪組織だ。奴らは手っ取り早く女たちを掠め取り、法の手の届かない所へ売り飛ばす。

その組織のアジトの一つを、今夜潰す。

囚われた人間以外の生死は問わない。

こちらを攻撃もしくは阻止しようとする者は誰であれ無力化しろ。

目撃者は残すな。

もし非武装の組織員がいた場合は拘束して連れ出せ。こちらで処理する。  
サキュバスファイブがビル内へ潜入し、敵を攪乱する。可能なら警戒システムを切る。

サキュバスツー、スリー、フォーは、ファイブの攪乱と同時に突入。障害を排除し、人質を救出する。

サキュバスワンは援護。

任務が終了次第すみやかに撤収。

質問は？▽

\*

司令官の声を聞いていた運転席の男が言った。

「こちらスネークタン。人質を救出してからは？」

大型のバンに乗った男は、マジシャン同様若かった。

スリーピースのスーツをきっちり着こなしているとはいえ、顔立ちはず

ビーフェイスに近い。どこといって特徴のない男で、平凡を絵に描いたよう  
だ。別れたらすぐ顔を忘れてしまうような…。

△すでに貨物車カゴが用意されている▽

「コマンダー。今回の相手は、人間だけなんですよね？」

△そうだ▽

「【エース】絡がらみなんですか？」

一瞬、返答が遅れた。

△【百人会】の要請だ▽

「なるほど…」

『スネークタン』がわずかに眼を細める。

△百人会ならしようがねえだろ。それより事はもうすぐだ。集中しろ▽

マジシャンが割って入った。

「コピーザット  
了解した。」

：みんな、聞いてたね？ 急な用事ですまないけど、がんばって」

「コピー  
了解です」

「ウイ  
Oui」

「コ、コピー」

カーテンを隔てた後部席に居るのは3人の少女だった。

一人は、あどけない丸顔の少女。

体つきは小柄で、まだ幼さが残り、せいぜい小学校高学年か中学1年生くらいに見える。

カチューシャでセミロングの髪をまとめ、上に2、3本癖毛が立っている。

白シャツにジャンパースカートを羽織り、縞模様のハイソックスとローファー。首にスカーフを巻いている。

その上からタクティカルベルトを装着し、拳銃と予備の弾倉マガジンと救急医療ポーチを着けている。頭には狙撃手の少女と同じくマイクロフォン付きヘッドセットを被り、サングラス型の暗視ゴーグルアサルトライフルを着けていた。

両手に銃身の短いカービン型の突撃銃アサルトライフルを持っている。その銃はライムグリーンとグレーで塗り分けられ、やはりゲームに使用するトイガンのようなだった。

一人は、浅黒い肌の外国人風の女の子。

顔つきが独特で典型的な西洋人とモンゴリアンの特徴が入り混じっている。ひとことで言うと、どこの国の人間か分からない顔立ちをしていた。

彼女もかなり小柄で、どこかしら大人びた雰囲気はあるものの、体格は中学生のそれだった。

白シャツに濃いベージュの薄いセーター。ローアンバーのノータックパンツにローファー。首にスカーフ。

身にまとっているのはタクティカルベルトと拳銃、予備の弾薬。ただし予備弾はベルト周りにたくさんのホルダーがついている、いわゆるカートリッジベルトと呼ばれるものだ。頭に着けている物も童顔の少女と同じ。

持っているのはゴツイ散弾銃ショットガンで、銃に詳しい者なら、それが2つの筒状チューブラーの弾倉マガジンを持つ特殊な形態だと分かる。およそ華奢な少女には似合わない代物。こちらはタンカラー。

そしてもう一人は、ふたりと比べやや年長の少女。

タヌキ顔とでもいうのか、そこそこ美少女ではあるけれど、どこか愛嬌がある。身長は平均的で、女子高生くらいに見えた。ロングヘアをたなびかせ、やや茶髪らしい地毛をしている。

白シャツとベスト、ギャザースカートの上から膝丈までのスポーツジャケットを羽織り、黒いロングソックスとローファー。やはり首元にスカーフ。

タクティカルベルトと拳銃、頭部の装備はふたりと同じだが、大きめのシオルダーポーチをぶら下げ、これまたゴツイ擲弾グレネード発射銃ランチャーを所持していた。

ランチャーは黒い銃身とオレンジ色のレシーバーで色分けされていた。

知っている者なら、チャイナレークと呼ばれている物に似ていると気づくだろう。直径40ミリもある巨大な弾薬を4発装填そうてんできる。

3人の女学生に物々しい武装。

奇妙な組み合わせだ。

スネークタンは続けた。

「ぼくがバンで乗りつけるから、きみたちは建物に突入だよ。京香ちゃん、きみがリーダーだ。指示を出してくれ」

「了解です」

京香と呼ばれたサキュバスツーこと童顔の武装少女は、他のふたりへ向き直った。

「マリーちゃん、みさおさん。合図があり次第、ビルへ侵入します。わたしが先行、マリーちゃんがアタッカー、みさおさんがバックアップ」

「O u i」

サキュバススリーこと浅黒い少女マリーが冷静にうなづく。もう何度も経験したような態度だ。

「りよ、了解です」

サキュバスフォーことJKのみさおが緊張気味に頷いた。

「目標は人質の救出です。人質の生命を最優先にしてください。

それ以外の者はためらわずに倒します。

武器を所持しているのを確認したらただちに発砲してください。相手が武器を捨てて投降した場合、余裕があれば拘束し、なければ足を撃つて無力化します。そして、  
」

と、暗視ゴーグルに内蔵されているラップトップ機能で仮想端末のキーボードを指で叩き、ゴーグル内に建物の見取り図を3Dで表示する。

「ビルは全部で4階。ガレージが1階部分で、あとは事務所用のスペースです。階段はひとつ。エレベーターはなし。非常階段はありません。各階の移動は階段だけです。」

確認できたところでは、建物内にいる組織の人員は8名。ターゲットが到着すればさらに増えます。

巴さんが人質のいる場所から移動します。脱出を防ぐため人質はおそらく4階。そこでわたしたちは玄関から階段までを抑えます。2階と3階の出入

り口を封鎖し、巴さんと合流。それから、まず人質の安全を確保し、1階まで抵抗を排除しつつ降りてゆきます。向かいのビルのり子さんは、ビルの表を援護しています。

…サキユバスワン、聞こえますか？」

回線を切り替えて暗号化通信で呼び掛ける。

△サキユバスワン、よく聞こえてるよ▽

「サキユバスワンとスリーとフォーで突入します。出入り口の確保お願いします」

△オツケー、バッチリ任せて▽

「敵を掃討したら、人質を別のバンに乗せ、それぞれ撤収します。敵の生存者は他の車へ載せます。目撃者は残しません。ここまではいいですか？ 質問があったら言ってください」

淀みない口調で説明する。

「Non」

「わ、わかりました。やります」

みさおがランチャーをグッと握る。

歳下の京香はフツと余裕の笑みを見せ、

「だいじょうぶですよ、みさおさん。上手くいきますから」

「se detendren」

マリーも頷く。

「よし、決まったね。」

…マジシャン、こちらは準備Okだ。合図頼む」

スネークタンが呼び掛ける。

△あとはファイブ次第だな。博打みたいな作戦だぜ、これ…▽

「私語は慎みなよ。士気が落ちるだろ」

△あいよ。…今、情報が入った。

玄関先の男が特定できた。名前はブランコ・ミロシエヴィッチ。セルビア人とクロアチア人の混血だ。クロアチアで何件か殺しの前科があり、パリへ逃亡して今の組織にスカウトされた。

組織の名は『Manos de Gloria』。『栄光の手』って意味だ。絞首刑になった男の左手を切り取って乾燥させた呪具のことで、死体から取り出した脂肪を干からびた指先に塗って蠟燭がわりに火を点すと、神秘の力が手に入るっていう悪趣味な迷信。

元はメキシコの麻薬組織だったが、『大災厄』<sup>カタストロフ</sup>の後、めちやくちやになった国内から逃げ出して、あちこち散らばったが、そのうちの 하나가日本へ行き着いちゃった。まあ、大災厄のおかげで世界中に民族大移動が起こって、

災厄から逃れるためにみんなバラバラになったからな。今じゃ単一の民族で成り立つ国家なんて5本の指にも入らねえ。みんな多民族国家だ。日本だって外国系の住民が3割に近い。

犯罪組織も同じだ。いわゆる多国籍企業化してる。

だもんで、ナントカグロリアも日本に居着いて商売を始めたってわけだ。

フランスにいる組織が向こうの締め付けがキツくなってきたから、ミロシェヴィツチも一緒に日本へやって来た。で、こっちで麻薬より簡単な誘拐ビジネスに転向した。なんだかんだで日本は麻薬に関しちゃ世界有数の取り締まりの厳しさだからな。製造コストも人件費も掛かる。売り捌くさばのも手間がある。

その点、人さらいは安上がりだ。

売春、拷問、臓器移植…需要はいくらでもある。

捕まった女たちはボロボロになるまでレイプされ、使い物にならなくなつたら殺される。だいたい半年持てば良い方だ。死体は焼却され、身元が分からないよう歯型を抜かれて、その辺の川なり山なりに捨てられる。ま、そんなところかな▽

「うええ…なんてひどい」

みさおが平凡な感想を漏らす。

「建物に居る人たちは全員組織の人間なんですか？」

顔色も変えず京香が質問する。

△奴らに手を貸す暴力団も混ざってるかもな。どつちにしろ同じ穴のムジナだ▽

「違う組織が居るかもしれないですね。わかりました」

「…おっと、噂をすれば影だ。連中の車が近づいてくる」

運転席のナビゲーターに赤い信号を発する物体がマップ上で近づいてきた。

△ドジるなよ▽

「そつちこそ。オーバー」

運転席にもたれかけると、スネークタンは眼をつむった。

\*

サキュバスファイブこと『巴』は、暗闇の中にいた。

異臭がする。

人の汗と汚物の匂いだ。

自分の周りには7人の若い女性がいる。ティーンエイジから二十歳過ぎまで、それぞれ違う民族の女たちだ。

ここは冷凍車の中で、いつもは食肉を運ぶ車のボックスだ。

今夜の肉は自分たちというわけだった。

巴は薄っすらと目を開け、見るともなしに見ていた。

もし照明があるなら、彼女が女子高生くらいの美少女だとわかる。

鴉の濡れ羽色の長髪を切り揃え、前髪はパツツンにしている。切れ長の眼とほっそりした顔立ち。肌は雪のように白く、北欧系の肌とは少し違う。

着ている物は白いブラジャーと黒タイトのみ。パンティは穿いていない。

冷凍車へ乗せられる前に脱がされたからだ。他の女たちと同様に裸足だった。

巴は、作戦の指示に従って、夜の街を一人で出歩いていた。

そしてマノス・デ・グロリアの縄張りへ入り、そこでスカウト役の美形の青年に声を掛けられた。「アイドルにスカウトしたい」という極めてありきたりなナンパの手口で。

実際、巴はスカウトされるのが自然なほど美しい。

顔ばかりでなく、立ち居振る舞いにどこことなく気品があり、その気になればテレビに出演していてもおかしくない。

巴は世間知らずで好奇心旺盛な女子高生を真似て、スカウトの甘言に乗った。

クラスの女子が経験済みなのを焦って、なんとか処女を捨てるのにふさわしい相手に出会いたい、というウブな理由で、誘われるままナイトクラブへ行つたのだ。そこは未成年でも暗黙の了解で入れる怪しい店で、表向きはオシャレなクラブだが、壁の向こうは地獄だった。

巴は強い酒を飲まされ、酩酊したところを奥の部屋へ誘導され、そこで屈強の男たちに囲まれた。

怯える彼女を力づくで押さえつけると、男たちは服を脱がし、口を開けさせ、耳の穴を覗いた。隆へ指を入れられた時は悲鳴を上げたが、巴はほんの少しだけ感心した。連中は手を抜いていない。どんな隠し場所も点検する手順だけは守っている。

もつとも、巴の体内に埋め込まれた暗号化された発信器までは分からない。

たとえレントゲンで撮影したとしても見えないはずだ。X線を透過する特殊素材が使われている。金属探知機にも引っ掛からない。

万が一バレたとしても、全員殺せばいいだけの話だ。

半裸にされた巴は後ろ手に縛られ、冷凍車に乗せられた。そこはすでに捕まっている生け贄がおり、皆怯えきっていた。なので巴も顔を伏せ、怖がっているふりをした（構成員の顔は全部チェックしたが）。

そして今、アジトに向かつて運ばれている。

酔いはとつくに醒めていた。というより、そもそも酔っていない。

ウイスキーを丸々一本飲んでも酔わない。そういう訓練を受けている。

巴は暗闇でもある程度周りが見える。

幼い頃からの過酷な訓練により、人間にしては異常なほど視力が高かつ

た。ましてや彼女は：

ボックスの壁に頭をもたせかけ、巴はうなだれている少女たちを眺めていた。

後部の扉は完全に閉まっていない。１ミリほどズレがある。そこから入る街灯の光で十分だ。普通なら見えない物でも、巴なら見分けられる。

(…この中に組織の仲間がいる)

冷徹な目でひとりひとりを眺める。

腔内の武器を探るほどだ。監視役を混ぜても不思議ではない。そういうところは悪知恵が働く連中なのだ。

すすり泣いたり、ブツブツ呟いたり、肩を縮めている者たち。

好奇心で火遊びに近づいたり、無防備な旅行者や、単に運の悪い通行人。

皆、軽薄で不注意だったとはいえ、死ぬほどの罪を犯しているわけではない。

それを喰いものにする者たちがいる。

人間の皮をかぶった悪魔。

同情するに値しない連中。

巴は、怒れば怒るほど、冷静になるタイプだった。

氷点下の怒りを秘めながら、ジッと機会を待っている。

待つのは得意だ。

山で、虫に噛まれながら、3日間身動きしない修行を課されたこともあ  
る。排便はその場でした。それでも数ミリと動かなかつた。

そして、定められた標的を一撃で仕留めた。

そういう状況に慣れていく。

今回はその点では楽だ。

両手を拘束しているのがプラスチックの結束バンドだった時、あやうく笑  
うところだった。

用心深くせに抜けている。

油断しているのだ。

（あの女。ショートパンツを穿いていますわね…）

扉近くに頭を抱えて座っている日本人の女性。年齢は二十歳くらいか。

ショートカットの髪と細い手足。だが、肌の色つやは良い。目立った怪我の跡や殴られた痣あざもない。

なにより、他の女たちがパンティにシュミーズ一枚がせいぜいなのに、きつちりショートパンツにTシャツというのが怪しい。右腰を見せないようにしている。そこにコンシールド・キャリア秘匿携行の銃が隠されている可能性は高い。

両腕でガードして表情を見せないようにしている。

直感でクロだと分かる。

（まあいいでしょう。対処する方法はありますから）

巴は目をつむり、壁に背を預けた。

体力を温存するとともに、車の走行音に耳を傾ける。

周囲から反射する微かな音を聞いていると、冷凍車が目的地とは関係のない道を周回し、女たちを混乱させているのが笑止だ。万が一逃げ出した場合、警察に説明できないようにする手口だが、巴には通用しない。彼女はコンパスがなくとも方位を間違えたことがない。日が差さなくてもどちらが北か分かる。だから、ようやく車がアジトへの道を辿り始めた時、やれやれと思つたのだった。

\*

「Lo  
que  
esta  
ahí

「日本語で話せ、マヌケ」

運転手のスペイン語を、助手席の男がののしつた。

「日本語、ムズカシ」

「ああそうかい、こちとら日本生まれの日本育ちだ。言つとくが、きさまらの汚いスペイン語をお巡りが聞いたら、速攻でムシヨ行きだ。刑務所」

浅黒いラテン系の顔立ちだが、流暢な日本語を話す。運転手が首を振つた。

「No、No、Prision、no」

「で、なんだつて」

「なにか、いる」

「？」

助手席の男が、運転手の指差す先を見た。

バンだ。

白いバンが道端に停まっている。

前後を乗用車に挟まれて。

その辺に駐車場がなく、無断で路上駐車したように見える。運転席の窓は日除けのアルミカーテンで覆われていた。

白い車体には、アニメ風の美少女が描かれている。

『夢と希望とアイドルをあなたに♥クラウンカンパニー』

思いつきりテカテカに装飾されたイラストと標語がデカデカと恥ずかしげもなく掲げられていた。

こんな目立つ車で待ち伏せする警察はいない。

運転手は、ゆっくりとその脇を走らせた。

「あれがなんだ？」

「ハポネのアイドル、好き」

「なんだって？」

「Si、Si、Lindo」

運転手が無邪気な笑みを見せる。

助手席の男が天井を見上げた。

誘拐組織の構成員が言うセリフではない。しかも仕事 중이다。緊張感が無い  
としか思えなかった。

思わず懐の拳銃で射殺したい衝動を抑え、

「わかった、そのうちアイドルもかつさらってやる。だからさつさと車を走  
らせる！ でないと天国でアイドルに合わせてやるぞ！」

運転手が名残惜しそうに見ながら、冷凍車は通り過ぎていた。

それが道の向こうへ消え、音も聞こえなくなった時。

白いバンのエンジンが掛かった。

\*

冷凍車が近づくと、見張りの男がスマートフォンで告げる。

「来たぞ。開けろ」

こちらは訛りの強い日本語だ。

シャッターが軋みながら上がってゆく。中は広いガレージだ。内部へ通じるドアが開き、4、5人の男たちが現れた。中国系の四角い顔立ちから、黒人まで、皆それぞれ人種が違う。

共通しているのは、どれも黒づくめの開襟シャツとパンツを着て、ベルトに拳銃を挿さしていることだった。

冷凍車がバックで入ってくる。車が入るとすぐにシャッターが降りた。

車の後部扉が開く。

「fuck out！」

ブロークンイングリッシュで黒人が叫んだ。

女たちは後ろ手に縛られたまま飛び降りさせられる。中には転ぶ者もいたが、髪を掴まれて無理やり立たされた。悲鳴を上げると頬を叩かれ、「黙らないと首の骨を折ってやる」と脅された。

最後に巴が降りる。

肘を掴まれ、強引に降ろされて、よろけるふりをした。

男たちが口笛を吹く。

「ファッキンググッド」

「上玉だぜ」

舐めるような目で巴の体を見回す。

助手席から降りたラテン人が自慢げに言った。

「軽いもんさ。ちよいと酔わせりやお嬢様だつて股を濡らすぜ」

パチンと指を鳴らした。

「もう犯やつたのか？」

「いや。処女だ。手を出すなよ。こいつは高く売れる」

ヒュー、と再び口笛。

「しゃぶらせるのはどうだ？」

黒人の下品な冗談に男たちが笑った。ラテン人は眉を上げて唇を歪ませた。

「よし、運べ。納期が迫ってる」

醒めた口調でリーダーらしき中国系の男が言った。それを合図に「とつとと動け」と様々な言語で男たちが怒鳴り、囚われの女たちは上へ連れ込まれた。

「おまえは動くな」

ラテン人が運転席のメキシコ人を指差す。

「Por que?」

「いいから言うとおりにしろ」

「:si、Senior」

両手を上げて肩をすくめる。

「日本語を話せ。分かるんだろ」

やれやれと首を振り、ラテン人はガレージを出て行った。運転席に座ったまま、メキシコ人の男はスペイン語で「この連中はイカれてる」とつぶやいていた。

\*

巴は、女たちの列の最後尾を歩いていた。

ビルの内部はほとんど薄汚れている。

掃除をするという発想がないらしい。あちこちにビールの空き缶やコンビニで買った弁当のゴミが捨てられていた。中には使用済みのコンドームまである。

2階と3階のドアは開け放たれていて内部が見える。

2階では、折り畳みテーブルと折り畳み椅子があり、退屈そうに刺青をした3人の男たちがテレビを覗いていた。サッカーの衛生中継をやっている。悪態をつきながら男たちが談笑する。テーブルには吸い殻が山と積まれた灰皿と、酒の空き瓶、拳銃や短機関銃サブマシンガンが無造作に置かれている。

3階もやはり折り畳みテーブルと椅子、それに銃があった。が、奥の方にパーティションで仕切られた部屋があり、そこから長いケーブルが床を這っている。

(警戒システムですわね)

パーティションの向こうの男を盗み見しながら、巴は確信した。

(全部で11名。情報より1人多い)

ガレージから上がった男たちは、誘導役の2名を除いて2階の休憩室に入った。これで2階には7名。

巴たちは4階へ連れ込まれた。

そこは家畜小屋だった。

打ち出しのコンクリート地の壁とリノリウムの床。頭上に古過ぎて点滅する蛍光灯。据えた匂いが漂い、トイレ代わりのバケツが蓋をされている。

投げ出されるように入れられ、「おとなしく座ってないと殺す」と脅された。

「どつちに賭ける？」

去り際に白人の男が聞く。

「リアルマドリード」

黒人が言った。

「20ドルはいただきだな」

「てめえのケツをぶち抜くぞ」

笑いながら白人は去った。

ドアが閉まり、見張りの黒人が一人残された。

8人の、いや7人の女たちは、膝を抱え、床へじかに座りながら、恐怖の目で男を眺めていた。

黒人は190センチを超える巨漢で、胸や二の腕が異様に盛り上がっている。元プロボクサーか海兵隊あがりに見えた。両肩に悪魔の文句を刻んだ刺青をしている。

男は、薄笑いを浮かべ、女たちを眺めていた。

ベルトの右側にホルスターを挿し、拳銃を入れている。左側にはコンバットナイフ。ポケットにスマホを入れ、ロレックスの腕時計を嵌めている。

左右に分けられた女たちの間を、王様のように行ったり来たりした。

「どいつがしゃぶりたい？」

ニヤニヤ笑いながら言う。

「俺のどデカイ肉棒コックを」

そして、巴の前に立った。

これ見よがしに膨らんだパンツの股間を突き出す。

巴が、薄っすらと微笑んだ。

桜色の唇がきれいな三日月を描いている。

白い顔と相まって、見とれてしまうほど美しい。

異様な笑みだ。

監禁された部屋で浮かべる笑みではない。

黒人の、生存本能が、チリツと微かに警報を鳴らした。

しかし彼の理性がそれを邪魔する。

圧倒的に有利な状況での危険などあるわけではない。

「……………なにがおかしい」

その矛盾を、黒人は怒りに換えた。ぶちのめしてやろうかと身構える。自分よりも大きな男を殴り倒したこともあるのだ。

と、

スウツ、

巴が立っていた。

予備動作のない動きだ。

気がついたら、胸が触れるほどの距離で向かい合っている。

痩せた、白いブラジャーと黒タイツだけの少女が、いとも優しい笑みで黒人を見上げている。身長差30センチ。

結束バンドの落ちる、ほんの微かな音がした。

それが、指の関節を外して抜いたものだと言った黒人が理解するのに、2秒掛かった。

致命的な遅れだ。

眉をひそめた黒人がハツとして拳銃のグリップに手を掛けた時、下から迫る物があった。

刃やいばだ。

彼が持っていたコンバットナイフ。

その黒いブレードが、黒人の顎を真下から貫いていた。

首の付け根、喉仏のすぐ上。

刃渡り20センチに及ぶ刃が、気管を貫通し、背後の頸椎けいついをも突き刺し、神経を切断する。



黒人の目がグルンと裏返った。

白眼を剥き、「がっ」「ごっ」と小さく咳き込みながら、けいれん痙攣する。

巴は微笑みながら、それを見ていた。

コンバットナイフのグリップを握りながら、ゆつくりと、優しく、黒人を横たえる。ビクビクと痙攣する大柄な黒い肉体が床を這った。

女たちは、それを、信じられない目つきで見っていた。

目玉が飛び出しそうになっている。

ゆつくりと巴が振り向くと、「ひっ」と息を呑んだ。

その時、背後から動く者がいた。

あの日本人の女だ。

隠していた武器を突き出しながら、歯を剥いていた。  
スタンガンだ。

100万ボルトの電流を瞬時に流し、相手を昏倒させる。掠っただけでも痛みが走り、動きが鈍くなる。

巴はもう向き直っていた。

いつの間に振り返ったのか。

巴は、あえて避けなかった。

バチッ！！

青い火花が押し付けた肌に閃く。

…が、何も起きない。

巴はなおも微笑んでいる。

電撃などなかったように。

女の顔色が変わった。

「この売女！」

バチバチツ！！！！

二度、三度と火花が散った。

巴はよろめきもしない。

ただ面白そうに女を見ている。

：そこまできて、ようやく女は理解した。

相手が化け物だということ。

この、痩せ細った少女が、見かけよりずっと強いことを。

瞬またたく間に立ち上がり、黒人を刺し殺した技量は尋常のものではない。たと

え急所が分かっていたとしても、ああも簡単に刺せるはずがない。

それが出来るのは、経験があるからだ。

相当の訓練を積んで初めて可能な技。

まったく隙のない動き。

背後の敵を読む洞察力。

異常なまでの耐久力。

これがただの女子高生か？

女の手から力が抜けた。

巴が手を差し出す。

「よろしいかしら？」

こんな場面にはふさわしくない、上品な物腰。

女が、おずおずとスタンガンを渡した。恐怖の色を目に浮かべて。

受け取った巴は、ごく自然な動作でスタンガンを女の首に押し付けていた。バチッ！と青白い光が走り、ガクンと女が崩れ落ちる。

それを巴が微笑んで見下ろしている。

女が動かないと確認すると、あらためて周囲を見回した。

身を竦めた女たちが、思わず後ずさった。尻を動かし、巴から少しでも遠ざかろうとする。

悲鳴を上げる寸前、

スツ：

と人差し指が上がる。

巴の唇に、人差し指が重なった。

なんとという美しい動作…。

ただ指で「静かに」とジェスチャーしただけなのに、絵のような美がある。

女たちの動きが止まった。

巴は黒人の死体に向き直り、うつ伏せに転がすと、コンバットナイフを喉から抜いた。ブシュツと血が迸り、床を濡らす。しかし巴には掛からない。

血まみれのブレードを死体のパンツで丁寧めいどに拭ぬぐった。

そして女たちの結束バンドを切った。

「Don、t move」

同じ意味の言葉を、複数の言語で言い換える。

そして、一番落ち着いているインド人の女に黒人の拳銃を手渡し、別の一人にスタンガンを与えた。

気絶している日本人の女は、黒人が腰にぶら下げていた手錠で拘束する。

巴はドアに耳を当て、向こうの気配を伺うかがった。

それから静かにドアを開け、もう一度女たちを見てニコリと微笑むと、手で「動くな」と制して、部屋から姿を消していた。

\*

「動いた」

マジシャンがつぶやいた。

モニターに3D表示されているビルの中で、赤い信号が、4階から3階へ降りてゆく。

△こちらマジシャン、サキユバスファイブがビル内を移動している。最上階から3階へ移動中だ▽

△こちら司令官<sup>コマンドー</sup>、見張りはまだいるか▽

△玄関前で待機している▽

△サキユバスワン、発砲を許可する▽

△サキュバスワン、了解<sup>コペー</sup>▽

△コマンダーからマジシャンへ、周辺警戒を怠るな▽

△マジシャン、了解<sup>コペー</sup>▽

△こちらスネークタン、今から突入を開始する▽

\*

巴は4階のドアを抜けると、そつと階下を伺った。

2階から賑やかな声が聞こえてくる。テレビの音量を上げてサッカーの試合中継が歓声と興奮したアナウンスを響かせている。それに負けず劣らず男たちが声を上げ、罵声と声援を送っていた。

ドアはやはり開いている。

3階はというと、物音が聞こえない。

巴は瞬時に判断し、音もなく階段を滑るように降りた。裸足が有利に働

く。  
開いたドアから覗くと、案の定テーブルの近くには誰もいない。奥のパー  
ティションからわずかにコンピューターの冷却音が聞こえた。

するりとドアを潜り、気配を消してそちらへ歩む。

外から眺めると、ごく普通に歩いているようにしか見えない。だが、パソ  
コンの警戒システムで周囲を監視している男は全く気づかなかった。

システムを操作する男は大学生くらいに見えた。

痩せて、眼鏡を掛け、携帯ゲームで遊んでいる。肌は白いが、鼻の頭が大  
きく、唇が分厚い。白人と黒人の混血。

数センチまで近づいて、体温を感じ、やっと振り返る。

巴が冷たい目で見下ろしていた。

冷ややかな笑みを浮かべて。

一瞬、状況が分からない。

操作員の男は口を開け、白いブラジャーと黒タイツの少女を見つめた。夕  
イツから股間が透けて見える。だが、性欲が湧くどころではない。

巴の右手がコンバットナイフを握っている。

黒いブレードの白い刃先に、薄っすらと赤い血痕が着いている。

「To be, or not to be？」

ハムレットのセリフ。

学生風の男は、カラカラになった唇を舐めた。声が出ない。

答えを間違えたら、一瞬で死ぬ。

もう一度巴が問うた。

「n、no t t o b e」

掠れた声で男がやつと答える。

巴が優しい笑みを浮かべた。

そして英語で床に伏せるよう指示した。

男が言われるままにすると、ダクトテープで手足を縛り、口の周りをグルグル巻きにして拘束する。

それからパソコンへ向き直り、一通り見渡してシステムを理解すると、警戒システムを切り、挿していたUSBメモリーを抜く。

青年から奪ったスマホで電話番号を押した。

暗号化された秘匿回線へ繋がる。

「こちらサキュバスファイブ、ビルの3階に居ます。人質は全員無事ですわ。見張りを1名と、警戒システムの操作員を1名無力化しました。操作員

は生きています。それと1階の車に1人乗っています。他は2階に居ます。全部で7名。

敵の武装は拳銃にサブマシンガン、アサルトライフル、軽機関銃。手榴弾は目視したところでは確認していません。

わたくしは1階の1名を制圧しますわ」

「こちらマジシャン、目ぼしい情報があつたら集めてくれ。今から突入を開始する」

「了解」

スマホを切ると、メモリーをブラジャーの中へ入れ、バルコニーへ出る。非常用の避難梯子を見つけると、床の蓋を開けて縄梯子を下ろし、スルスルと降りていった。

\*

サキユバスワンこと『のり子』は、身じろぎもせず標的を狙っていた。もうかれこれ3時間近いのに、微動だにしない。膝立ちという不安定なスタンスにも関わらず、石で出来たように動かない。

スコープの中の十字線が、見張りの男の横顔を捉えている。十字線の交差する点が、ほんの少し上へズレた。

女子高生の細い人差し指が、優しげに引き金トリガーへ触れる。

そして、早くも遅くもない速度で、真っ直ぐに振り絞った。

パシツ、

という音が銃口から破裂した。

銃声が闇に吸い込まれる。

それほど小さな音ではない。近くで聞けば強く手を叩いたくらいに聞こえる。だが、減音器サレッサを着けていなければ、こんなものでは済まない。それこそ破裂するような音が周囲へ響くことになる。

長大な筒が音を抑えていた。

7階建のビルの上なら、まず下へは聞こえない。聞こえたとしても、どこから撃ったか分からないだろう。

それにも増して重要なのは、発砲炎が見えないことだ。

昼間ならまだしも、真夜中に発砲すれば、銃口から噴き出る炎が遠くまではつきり見える。当然発見されれば不利になる。

今の射撃はマッチを擦った程度だ。

何もかも計算済み。

スコープの中で、発射音からほんの一瞬遅れて男の側頭部に穴が開き、反対側にパツと血しぶきと骨片と豆腐のような白い物が飛び散るのが見えた。

「あれ？」というように、男の体がグラついて、その場に崩れ落ちる。痛みも感じなかつただろう。

悪党にしては恵まれた最期だ。

「こちらサキユバスワン、ターゲット標的ダウン」

△こちらら司令官、戦果確認。引き続き待機▽

「了解。」

…さあて、パーティーの始まり始まり〜」

不謹慎に独り言をつぶやくのだった。

\*

白いバンがビルの前で停止した。

例の『クラウンカンパニー』だ。

派手派手な車体が、これから起こる惨劇と見事な非対称を成している。

バンの両側面と後部ドアが開き、スツと少女たちが降りてきた。

右側から京香、左側からマリー、真後ろからみさお。

全員、首に掛けていたスカーフで小鼻の上まで覆い、顔を隠している。

京香が銃を構えながらすばやく右側を、マリーが左側を、みさおが後ろを見渡し、誰もいないのを確かめる。

そして玄関口の階段に倒れている死体へ近づいた。

「サキュバスター、録画開始します」

喉頭マイクに告げると、倒れ伏した男をひっくり返し、その顔を眺める。

ヘッドセットに付属している小型カメラがそれを写す。

右側頭部の血まみれの大穴には見向きもしない。タクティカルベルトに装着した多目的ポーチを開き、中に並べている試験管のようなチューブを取り出した。

チューブのキャップを外すと、蓋に綿棒がくっついていてる。

死体の口を開けさせ、軽く口中を拭って唾液を綿棒に吸わせた。

それが終わるとチューブへ入れてキャップを閉め、多目的ポーチに戻した。

後ろを振り向き、警戒しているふたりへうなずくと、指を2本立てて、前方へ倒した。それから音を立てずに階段を昇る。その後をマリーが追い、みさおが続いた。

磨りガラスの向こうに人影はない。

京香がガラス戸の前に立たないよう、ドアの脇へ忍び寄る。ノブを捻ると、動かない。オートロックだ。

京香がうなずき、ドアから退いた。

マリーがショットガンを構えて近づく。

みさおは玄関に背を向け、周辺を探っている。

マリーは2本のチューブラーマガジンの切り替えレバーを押し、そのうちの1本を選んで、ポンプを動かした。ガシヤリと音がして弾が1発装填そうてんされる。ドアを破るためのブリーチ弾だ。

ドアノブの根本に銃口を押し付け、引き金を引いた。

バンツ！と音がしてドア枠に穴が開く。マリーはポンプをもう一度ガシヤリと動かし、また撃った。それから思い切りドアを蹴ると、簡単に開いた。

「煙幕！」  
スモーク

京香が叫ぶと、すかさず後ろからみさおが出て、中へ1発擲弾グレネードを撃ち込む。

スポンツ！…

それは2階の踊り場へ転がると、白い煙を勢いよく噴き出した。特殊な煙が視界を遮るかきふさぐ…が、赤外線モードに切り替えたゴーグルには中がはつきり見えた。

京香が滑るように進入する。

アサルトライフルを構えつつ、上体を揺らさず移動した。姿勢はやや前屈みで、銃を挟むように右肩を上げている。左手は銃身を覆うハンドガードを掴んでいた。

銃の上に装着されている小型照準器ダットサイトを覗き込む。

小さな透明の窓の中央に赤い光点が輝いている。その中に人影が入り込んだ瞬間、タンタンタン！、単射シングルで3発撃っていた。拳銃を持った男の額、喉、もう一度額にポツポツと穴が開き、その場に倒れる。

2階からテレビの騒音と、男たちの怒声が響く。

愚かにもガンマン気取りで片手に拳銃を持った男が、2階のドアから身を乗り出し、撃とうとした。デザートイーグルだ。50口径のバカでかい弾を発射する。当たればまず即死。が、銃を構える寸前、またもや京香の射撃がタン！タン！と男の脳味噌を後ろへ派手に撒き散らしていた。

テレビの音が消えた。

急に静寂が広がる。

耳がキーン……と痛い。

階上から、押し殺した息遣いが微かに聞こえる。

京香とマリーが狭いエントランスホールへ左右に分かれて入る。みさおはなおも表を警戒していた。

突然わめき声が上がリ、階段の踊り場に、またも一人が現れた。今度は軽機関銃を構えている。箱型弾倉ボックスマガジンに100発入ってる。それで狭い階段へ弾を

の雨を降らせれば、そこら中が穴だらけになるだろう。京香はその無茶ぶりにちよつとだけ感心した。

男は防護服ボディアーモを身につけていた。前面と股間を守るジャケットで、胸部にはセラミックプレートが入る。拳銃弾なら完全に、小銃弾でも大口徑以外は直撃されても耐えられる。

「ユー、マザーファッカー！」

下品な罵声を浴びせながら引き金を引いた瞬間、マリーのショットガンが吼ほえた。

ドンッ！

ショットシェルから散弾が放たれる。

「ゲッ！」

吹っ飛ばされた男が後ろへ尻餅をつく。

軽機関銃の弾がダダダ！と天井へ向けて飛んだ。

マリーは猫のようにすばやく駆け上がると、さらに2発、3発と撃った。今度は対人用だ。レバーを切り替えて別のチューブから違う種類の弾を装填していたのだ。

いくらボディアーマーでも、至近距離から鉛の弾を8個も浴びれば、衝撃で息が出来なくなる。ましてや射撃など論外だ。

マリーは京香同様、少しも上体をブラさず、機械のような正確さで弾を浴びせ、男を床へ倒した。ショットガンの銃口で押し付けるように顔を狙う。

煙の中から現れた敵が、武装した華奢な少女だと見た時、男が驚愕に眼を見開いた。

「Wa<sup>ウ</sup>it<sup>ェ</sup>、ki<sup>キ</sup>dd<sup>ッ</sup>！」

ダアンンンン！

男の顔が弾け飛んだ。真ん中にベコリと穴が開く。

京香がマリーのすぐ後を追い、誰かがドアの向こうで叫んでいるところを、アサルトライフルで連射した。ダダダ！と室内へ5・56ミリの弾が飛び、相手を牽制する。

「ターゲット3名ダウン、残り4名」

マイクに言いながら、入口のすぐ脇へ素早く移動して隠れる。

マリーが反対側へサッと移動し、腰を屈めた。

京香もその場で屈む。

その途端、

ダッダダダ！

すぐ頭上の壁に穴が開き、銃弾が通り過ぎていた。アサルトライフルなら易々と壁を貫通する。

その短い間に、京香はまだ残弾のあるマガジンをアサルトライフルから抜いて、新しいマガジンと交換し、ボルトフォワードアシストのボタンを押して初弾を薬室チエンバーに送った。マリーはタクティカルベルトのホルダーから12ゲージのショットシエルを抜くと、排莢エジエクシヨンボルト口から3発装填した。

銃撃がいったん止む。

すかさず京香が階下を振り向いた。

「グレネード！」

階段の半ばで待機していたみさおが一気に駆け上がり、ゴツいグレネードランチャーを構えると、ドア越しに撃った。ポンッ！といささか間抜けな発射音がした次の瞬間、

グワツツツ!!!

凄まじい爆風が部屋の中を暴れ回る。

周囲の窓が一齐に外側へ碎け散った。

口径40ミリの弾薬が炸裂し、金属片を辺りに撒き散らす。鋭い金属の極小ナイフが人間を切り刻んだ。

あり得ない光景だ。

普通、この手のランチャーは、25メートルを越えないと爆発しない。距離を置かないと、撃った方が爆発に巻き込まれて負傷するからだ。それゆえ信管は、ある程度弾が飛ばないと発火しないよう出来ている。せいぜい4、5メートルの距離で爆発させるなど自殺行為以外のなものでもない。だが、みさおのランチャーに使われるグレネードは、その設定がなかった。

当たれば、それがどこであろうと即、爆発する。

現に、みさおを始め、京香もマリーも金属片を幾つか浴びたが、意に介した様子もなかった。

濛々たる煙が入口から流れてくる、その黒煙の中へ京香とマリーが飛び込んだ。  
んだ。

赤外線ゴーグルが明かりの消えた室内を視認させている。

部屋の中は爆風でめちゃくちゃに吹き飛んでいた。通常の炸薬より多いグレネードが破裂したせいで、折り畳みテーブルは二つに折れ、椅子はひしゃげている。血ダルマになった死体が2つ、床に転がっていた。一つは足が太股の付け根から千切れかけている。

京香とマリーは左右に素早く分かかれ、対角線上の射界で互いをカバーしつつ、まだ生存している者を探した。

床に倒れているものの、まだアサルトライフルを手放していない男が、呻めきながら銃口を上げようとする。その胸部へマリーがダン！と散弾を1発ぶち込み、のけ反ぞったところを京香がパパン！と頭部へ2発お見舞いする。

最後は助手席に乗っていたラテン人だった。

テーブルが偶然盾になったせいで、致命傷はまぬがれているが、爆発の衝撃で神経がイカれていた。全身傷だらけで、身動きが取れない。

「…なんなんだ、おまえら…」

ラテン人が眼を剥いた。両腕が真っ赤に染まっている。

「い、一体なんなんだ！？ どのもんだ！ ガキが銃を振り回しやがって」  
恐怖のあまり失禁しながら喚わめいている。

「てめえら分かってんのか！？ 誰に喧嘩を売ったと思ってる！」

「マノス・デ・グロリア」

マリーが無表情に答えた。

「そうだ『栄光の手』だ！覚えてやがれ、てめえらの家族も、てめえらも、みんな殺してやる！てめえらはおしまいだ！！」

「あなたがリーダーですか？」

京香が冷静に問う。

「うるせえ！ガキがなに言ってるやがる！」

△こちらマジシャン、顔認証でそいつの身元を確認した。名前はホセ・マツモト・エルナンデス。日系2世だ。移民のエルサルバドル人と日本人の子供だった。貧しさで子供の頃から犯罪へ手を染めている。何度か捕まってるが証拠不十分で不起訴。だが、こっちの調べでは少なくとも5人は殺してる。誘拐した女たちを含めればもつとだ▽

「こちらサキュバスツ、彼はアジトのリーダーでしょうか」

△このビルで捕まえた人質を売買している。仕切ってるのはその男だ▽

「引き出したい情報は？」

△そいつには無いな▽

「拘束して警察へ渡せば、有罪になりますか？」

△どうだろうな。最近の警察は腐敗してる奴もいる。組織には金がうんとある。警察じゃなくとも、別の方面から裁判をうやむやに出来る可能性は大いにある▽

「彼の家族は？」

△家族とは絶縁。恋人、妻、なし。性欲は誘拐した女で処理してる▽

「おい、何を話してる！俺のおふくろを殺すつもりか！？」

「安心してください、あなたの家族には手を出しません。殺すのはあなただけです」

パン！

いつの間にか抜いた拳銃で撃っていた。

ラテン人が仰向けに倒れる。額に空いた穴を見つめるように、眼を寄せていた。

「こちらサキュバスター、ビル内のターゲットはすべて無力化しました。あとは1階の1名のみです」

「こちら司令官、それはファイブに任せている。人質を誘導し、死体からサンプルを入手しろ。持ち運べるデータもだ」

「サキュバスター、了解<sup>コピー</sup>」

「…終わりました？」

入り口からみさおが顔を覗かせた。

「だいじょうぶですよ」

京香がうなづく。

みさおは、グレネードランチャーを手におそろおそろ部屋へ入った。

辺りは戦場だ。

屍しかばねるが累々るとしている。

窓ガラスはすべて吹き飛び、カーテンは千切れ、夜の黒い穴を開けていた。

ふう、とみさおがため息をつく。

「嫌なもんですねえ…」

つい、愚痴をこぼした。

マリーがみさおの肩を軽く叩いた。

「p a s s g r a v e」

「わたしがDNAを採取しますので、みさおさんとマリーちゃん是人質さんと捕まえた人をお願いします」

「了解です」

「Oi」

京香は多目的ポーチを開くと、綿棒で死体の唾液を取り始めた。

みさおとマリーは油断なく銃を構えつつ、階段を昇ってゆく。マリーは上を、みさおは拳銃で下を。

そして、4階の牢獄へマリーが、3階の方へみさおが散っていった。

\*

巴は地上に降り立つと、辺りを伺った。

人の気配がないのを確かめ、ひたひたと足音をひそめて表へ回る。

玄関の階段には見張りの死体が転がっていた。それをチラリと見て、バンの助手席の窓をそつと叩く。

スネークタンがギョツとしてこちらを見た。

油断なく見張っていたはずなのに、巴が近づくのに気づかなかつた。

巴は微笑むと、きびすを返し、階段を猫のように昇つて玄関口から入つていった。

(毎度のことながら参るなあ)

スネークタンがふう…とため息をつき、ネクタイを直した。

少女たちの能力に比べれば、自分など案山<sup>かかし</sup>子だ。

\*

運転席のメキシコ人は、さつきから息をひそめていた。

いつまで待たされるのか分からなかったが、組織の命令は絶対だ。

(嫌な仕事に関わっちまったぜ)

金のためとはいえ、まさか女の子を運ばされるとは…。これが麻薬ならまだしも、うら若い女性を商品にするのはいい気分ではない。だが、一度関わった以上、抜けられないことも承知していた。抜ける時は死ぬ時だ。連中は口封じのためなら運び屋を始末することくらいなんとも思わない。

仕方なくスマホでゲームでもしようか…と思った矢先。

…タンタンタン！

壁の向こうからくぐもった銃声が聞こえてきた。

(…なにっ!?)

メキシコ人は仰天した。

襲撃があるなんて聞いていない。

何か、対立組織と揉めたのだろうか？

まさか日本の警察？

焦った運転手は冷凍車のエンジンを掛けようとして、キーを回す手を止めた。

今、エンジンを掛けたら、その音で奴らに気づかれる。

相手が誰だか分からないが、気づかれたら間違はなく殺される。

シャツターを上げることもできない。表で誰かが見張っている。

メキシコ人は、突然天から降ってきた災いに身を竦すくませた。

(人身売買なんて悪いことに関わったからマリア様がお怒りになったんだ)

「: St. <sup>サンタ</sup> Maria, <sup>マリーア</sup> por <sup>ポル</sup> favor <sup>ファボル</sup> per <sup>ペ</sup> don <sup>ド</sup> ame <sup>ナメ</sup>」

思わず十字を切る。

…と、バックミラーに人影が映った。

メキシコ人が息を飲んだ。

今にも銃を手にしたギャングが自分を殺そうと…は、していなかった。

白いブラジャーと黒タイトの美しい少女がこちらへ近づいてくる。

(あの子だ！)

慌てて車を降りる。

「? Que <sup>ケ</sup> pas <sup>パ</sup> so? <sup>ソ</sup> Te <sup>テ</sup> es <sup>エ</sup> ca <sup>カ</sup> pa <sup>パ</sup> ste <sup>ステ</sup>! ?」

混乱した頭で、少女が口を開く前にまくしたてる。

「Senhorita, Espeligrorso aqui.  
Huyamos juntos!」

この状況下で出来るかどうか分からないことをしようとする。

少女は、この人のいい男を面白そうに見ていた。そして彼がシャッターを  
開けようと動いた時、手首を掴んで止めた。

「Que?」

そこで初めて、少女の手にコンバットナイフが握られているのが分かる。

その刃に微かな血痕があることも。

そして、異様なほど落ち着いた態度にも。

メキシコ人は再び仰天した。

(彼女、組織の一員だったのか!?)

反射的に両手で降参していた。

少女は微笑みながら、人差し指を唇に立てて「静かに」とジェスチャーした。

「No hay problema, Señor」

滑らかなスペイン語で言う。

「Por favor que deseen el auto hasta que yo digas si」

「Si, si」

なんだか分からないが関わり合いにならないほうがいい。ナイフで促される前に、メキシコ人は冷凍車に乗り込み、きつちりドアを閉めた。

ここの連中は本当、みんなイカれてる。

\*

(…どうも落ち着かないな…)

スネークタンは運転席で待ちながらハンドルを指で叩いていた。

今ビルの中で行われている戦闘行為のことではない。

そういう事は数え切れないほど経験している。

年端もいかぬ少女たちが殺し合いをしていることについては、なるほど、いまだに気持ちの整理はついていない。

そういう稼業なのだ。

ある意味、疑問を持たなくなったら、転職した方がいいかもしれない。

しかし、問題はそれではなかった。

嫌な予感がする。

通信を聞いている限りでは、作戦は上手うまくいつている。

京香たちが突入して5分と経たぬうちにビルは制圧せいあつされていた。

相手は3倍以上だったが、その程度なら彼女たちの敵ではない。人間ならば。

だから、その心配はしていなかった。

(何か見落としてる…)

それがなんなのか分からず、眉根を寄せている。

そして、ふと玄関前の階段に転がっている死体を見た時、答えが分かった。

「こちらスネークタンからマジシャンへ。気になることがある」

「こちらマジシャン。なんだ？」

「周囲に脅威はないか」

△ない。あつたらこつちから言つてる。何が気になるんだ▽

「見張りさ」

△排除したろう？▽

「なぜ人質が到着しても見張りはビルに入らなかつたんだ？」

\*

その言葉を聞いた時、3秒と掛からずマジシャンは理解した。

「…くつそ！」

すばやくキーボードを叩き、防犯カメラの映像を次々に切り替える。

「こちらマジシャン。司令官<sup>コマンダー</sup>、見落としがあった。見張りが居たのは、今夜取引相手が来るからだ。人質を集めて移送したのはそのためだ。そのビルのがレージには2台分入る。そこで人質を別の車に乗せる手筈<sup>てはず</sup>だった」

\*

司令官はただちに応じた。

「こちら司令官、各員に告ぐ。人質を買いに来る勢力が近づいている。少なくとも大型バンと護衛の車が1、2台来るはずだ。取引現場に相手と同数以上の人員を連れてくるのは常套手段だ。

ビル内の各サキュバスは作業を切り上げ、ただちに人質を建物から出せ。サキュバスワン、周囲を警戒しろ。武装勢力をビルに近づけるな」

落ち着いた声で命令する。

△サキユバスワン、了解<sup>コピー</sup>▽

△サキユバスツー、了解<sup>コピー</sup>。人質を連れてビルを脱出します。迎える車は？▽

「あと3分で到着する」

△サキユバスツー、了解<sup>コピー</sup>しました▽

「司令官、200メートル先に該当の車両を確認。1台はフィアット社製の大型バン。あとは2台のセダンタイプ」

オペレーターがモニターに防犯カメラの映像を映し出す。

黒塗りの大型バンが、同じく黒塗りの自動車に前後を挟まれて移動している。車間距離を短かく取り、隊列を組んで走っていた。

「内部を確認できるか」

解像度を上げた運転席が映った。

いかつい顔の日本人とネイティブアメリカンの二人組が、先頭車両の運転席に乗っている。どちらもボディアーマーを着て、助手席の日本人はサブマシンガンらしき銃を持っていた。武器を隠そうともしていない。

「司令官からマジシャンへ。車両を確認した。見えるか」

△こちらマジシャン、確認した▽

△こちらサキュバスワン、先頭車両を阻止する▽

△こちらスネークタン、待ってくれ。ぼくが時間を稼ぐ▽

△おいおい、大丈夫か▽

△これでも詐欺師なんでね▽

\*

スネークタンは運転席の脇にある装置のボタンを一つ押した。

すると、音もなく白い車体が見るみるうちに黒く染まってゆく。電子塗料だ。同時に、ナンバープレートが自動的に交換されていた。あつという間に黒塗りのバンが誕生した。

ドアを開けて車を降り、ネクタイを締め直す。

向こうの闇から光が近づいてくる。

スネークタンは平静な顔でそれを待った。

先頭のセダンが停まり、スネークタンにヘッドライトを浴びせてくる。平然とスネークタンは受けた。

後続の車両が少し距離を置いて停まる。

セダンの助手席のドアが開き、日本人が降りてくる。

横幅の広い男だった。プロレスラーか柔道をやっていたように見える。

「やあ、どうも」

愛想よくスネークタンが言う。日本人はニコリともしなかった。

「<sup>アッ</sup>商品は？」

「あるよ」

「見せろ」

「いいとも。だがその前に、そつちも見せてくれないかな」

「何を？」

「金だよ」

「…そこできくたばってるのは何だ？」

日本人が目を細める。

見張りの遺体が階段の手すりからはみ出ていた。

「ああ、アレかい？」

スネークタンはゴミ袋を見るように言った。

「ちよつと揉め事があつて。うちの商品を自分のだと言い張るんでね。ま、よくあることさ」

「そうは思えないね」

これ見よがしにサブマシンガンを掲げてみせる。銃口がスネークタンを真つ直ぐ狙った。

そして、後ろの車からも、5、6人の武装した男たちが降りてきた。

「おいおい、きみらは一体何をしに来たんだい？」

「商品を受け取りにだ」

「そのオモチャを下ろさないと、おつかなくて取引に入れられないね」

「気にするな。俺の癖だ。商品アツを見せな」

「あのさ。基本的なことを言つていいかな？」

「なんだ」

「夜中とはいえ、誰かが見ているかもしれないのに銃を振り回すなんて、きみは馬鹿なのか？」

日本人が目を細める。

歩み寄ると、銃口をスネークタンの額につけた。

「馬鹿つてのは、くだらない冗談を言う奴のことだ」

「そうかい、それがぼくだってこと？ いいさ、引き金を引けよ。商品を受け取るかわりに鉛の弾を喰らうことになるぜ。それより金はどうした？ まさか強盗に來た？ あの窓から撃たれるかもしれないのに？ ああいうふうになりたいのかい？」

おどけて階段の死体を指す。

日本人がチラリと上を見る。

2階の窓が開いていた。

中は暗闇だ。

誰かが狙っていたとしても、こちらからはわからない。

「こいつがどうやって死んだか教えてやろうか。狙撃されたのさ。あの傷を見なよ。拳銃じゃあんな大きな穴は開かない。この辺のどこかに居るスナイパーのせいだね。うちはねえ、きみ、それくらいの用心はしているんだよ」

幾人かが上を見回し、小声で何か言った。

「それよりビジネスの基本に戻ろうじゃないか。ギブ・アンド・テイク。まづそちらから誠意を見せるのが筋つてもんだ」

頬を引きつらせ、日本人が銃口を下げた。それから配下の者へ顎をしゃくった。

アタッシュケースを持った黒人が進み出た。

先頭車のボンネットにそれを置くと、開いて、中に札束があるのを見せる。

スネークタンはスマホを取り出して言った。

「開けろ」

…キィ〜〜〜…

ビルのシャッターがゆつくりと上がってゆく。

「まず見本を見せる」

スネークタンの声に応えるように、

ヒタヒタヒタ…

ガレージから裸足の少女が歩いてきた。

ヒュウ…と誰かが口笛を吹く。

白いブラジャーと黒いタイトの美少女が、うつむきがちに、スネークタンの隣に立った。手ぶらだった。

スネークタンは彼女の肩を抱き寄せ、野卑な笑みを浮かべた。黒タイトの奥に見え隠れする股間を指差し、

「処女だ。50万ドルは固い」

「他の女は？」

「7名いる。どれも上物さ」

「連れて来い」

「よしてくれ。今だって綱渡りしてるんだ。ガレージの中で渡す」

スネークタンが呆れたように首を振った。

「きみらつて何も考えてないのかい？ 路上へ少女をぞろぞろ出すわけがないだろう。パトカーが通り掛かったらどうする。それでなくても、うちは敵が多いんだ」

「いいだろう。…バンを入れろ。」

おつと、そいつは俺が預かる」

スネークタンが巴を戻そうとする前に、日本人が奪っていた。

「ご自由に」

スネークタンが肩を竦める。

チラツ、とほんの一瞬、巴の眼が笑っているのが見えた。

「連れて行け」

日本人の指示で巴が後続のセダンへ連れ込まれる。

大型バンが動き出し、ガレージの中へバックで入ってゆく。それを追って日本人のリーダーとネイティブ、3名の部下が続いた。スネークタンはその後についてゆく。全員がガレージへ入ると、シャッターが降りた。

あとには巴と、5名の部下が残された。

巴はセダンの後部席に入れられた。両脇を武装した男たちが挟む。

男の手が伸び、遠慮なしに太股を撫でた。

「顔を見せな、メス豚ちゃん」

「これからブブウ言うんだろぅなあ」

顎に手を掛けられ、巴がスウツ…と顔を上げた。

とろけるような微笑みを浮かべて。

「……………」

左右の男たちが眉をひそめる。

「なんで笑ってる」

右のアラブ系の男が唸った。

「ごめんなさい。だっておかしくて…」

「何が」

左の白人が言った。

「だってあなたたち、これから死ぬんですもの。お気の毒に」

「なに!!!？」

バシッ!!!!!!

運転手の首が横へ吹っ飛んだ。

肩へ側頭部をくつつけ、ゴキリと首が鳴る。首の骨が折れていた。血しぶきがフロントウインドウに赤い絵を描く。

「野郎、裏切りやがった！」

助手席の男が叫んだ瞬間、そいつの口が衝撃波で広がり、真後ろの首からまたも血しぶきがパツと派手に咲いた。ゴッン！とサイドウインドウに後頭部をぶつけ、そのままズルズルと滑り落ちてゆく。

「ちくしょう！」

「くたばれ、クソツタレ！」

左右の男たちがサブマシンガンを構えて外へ出ようとしたその時、ピタリ、

と拳銃が二人を狙っていた。

目と鼻の先だ。

彼らが持つていた拳銃だった。

少女が腕をXに交差させ、二人を狙っている。

いつの間に抜いたのか。

狙撃に動揺した一瞬で、こうも鮮やかに盗めるのか。

二つの拳銃には、すでに薬室<sup>チェンバー</sup>へ弾が装填してある。

あとは引き金<sup>トリガー</sup>を引けばいいだけだ。

「…よせ、嬢ちゃん」

汗を浮かべながら、白人が隙あらば拳銃を奪い取ろうと、手をそつと動かした。

「メス豚じゃなかったのですか…?」

いとも優しげな声で巴が言った。

「冗談だよ、わかるだろ。危ないからそれを渡せ」

アラブ人が白人に目配せする。こつそりと奪い返…

「50万ドルって言っていましたけれど、」

独り言のように巴がつぶやき、

「安過ぎますわ」

ババン！

\*

外で待機していたネイティブが、慌てて先頭のセダンを発進させる。

しかし、10メートルと行かないうちに車体がグラリと揺れ、近くの電信柱に軽くぶつかった。ビー！とクラクションが鳴る。

そのサイドウィンドウに、穴がポツリと開いている。

後ろの車のドアが開き、男の死体を蹴落として、巴が降りた。

血まみれの体を見回し、ため息をつく。

「シャワーを早く浴びたい……」

\*

ガレージへ入った日本人とその部下は、油断なく銃を構えながら、スネークタンを睨んでいた。

「さっさと来させろ」

「金は？」

「女たちが来たら交換する」

そう言いながら、後ろの男たちがそつと安全装置を解除する。

スネークタンは気がつかないふりをして、スマホで「来させろ」と言った。

「あいつは誰だ」

冷凍車の中で口を開けて見ているメキシコ人を、日本人が睨んだ。

不運なメキシコ人の顔色は真っ青だ。

「見りゃわかるだろ。ここまでブツを運んできた運転手だよ」

言いながらスネークタンが振り返り、向こうに分からないよう、ウインクした。そしてまたネクタイを直しながら、

「まあ、色々言ったが、そちらとの取引は継続したいと思ってるよ。なにしろ美味しい商売だからね。ぜひご<sup>ひいき</sup>贖<sup>ひいき</sup>にしてくれると嬉しいな」

「てめえみたいなヒヨッコに話ができるかよ。なんで上の者が出てこない。責任者はどこだ？」

「だから言つたろ。うちは用心深い。たしかにぼくはヒヨッコさ。だから、いくらでも代えが効く。ぼくで済む用事なら、わざわざ上の連中が出てくるもんか」

「じゃあ、てめえを殺しても文句は出ないんだな？」

ニヤリと男たちが笑う。

スネークタンは肩を竦めた。

「まあね。だけど、面子を潰される。ぼくが死ぬ代わりに、そつちの誰かも死ななきゃ。ファイフティ・ファイフティ」

「賭けるか？俺は100万出す。てめえをバラしても問題ない方に」

「やつすいなあ。たった100万がぼくの命なのかい？ じゃ、あんたはせいぜい10円だな」

日本語の意味がわかる男たちは、失笑を漏らした。

日本人の顔色が変わる。

「…てめえ、取引が終わったら本気で殺してやる」

「そうか、じゃあ取引までは生きていられるってわけだ。うれしいね。上に感想を聞いてみよう。ほら、」

キイ、とガレージに通じるドアが開く。

「今来るところ…」

シュポンッ！

ワインのコルク栓を抜くような音がした。

同時に、ガレージの中へボールのような物が飛んでくる。

グレネード  
擲弾だ。

白煙を吹く弾が床へ転がった。

「Establecer！」

スペイン語で怒鳴りながら、スネークタンが身を投げる。サツとメキシコ人が運転席の下へ隠れた。

タタタ…と何かが駆け込んでくる。

男たちが銃を構えた。

そして、白い煙の中から、

「…はいはい、みなさん、こんばんは♪」

いささかの緊張感もない声で、京香が現れた。

いたいけな少女の出現に、一瞬、「は？」と男たちが固まる。

これはなんの冗談だ？

タタタン！

先頭の日本人が弾け飛んだ。

「ファック！」

京香を狙おうとした二人目は、

ダアンンンッ！！

冷凍車の背後から現れたマリーのショットガンの鹿弾バツクショットを至近距離から浴び、足を投げ出して倒れる。

タンタンタン！横へ滑るように京香がシャッター沿いに移動し、日本人の後ろの男の顔面を撃ち抜く。そしてマリイが4人目を倒した。

最後に残った男がかろうじてタラララ！と小型サブマシンガンを乱射する。

が、タタタタ！とすかさず京香がその腕を撃ち抜いて銃を叩き落とし、ダアン！とマリイが顔面を破砕して終わった。

ふたりは油断なく構え、倒れた男たちを見つめた。そして、少しでも身動きする体に拳銃の弾を撃ち込み、停止させる。

煙の中で呻き声がした。

「田沼さん！？」

京香が駆け寄る。

床に這っていたスネークタンこと『田沼』は、苦しげな顔をしながら片手を上げた。

「…だいじょぶ、跳弾だ」

ゲホッ、ゲホッと息を吐く。

「スーツは防弾製に限るね…めっちゃくちゃ痛いけど」

ふう、と京香が安堵の息をつく。そして田沼へ屈み込み、命中した箇所を手探りした。

「ここは痛いですか？…ここは？」

△こちら司令官。状況を報告しろ▽

「こちらサキュバスフォー、状況終了。全員ダウン。スネークタン負傷。サキュバスツーが診てる」

淡々とマリーが告げた。

△サキュバスツ、スネークタンの容態は▽

「こちらサキュバスツ。スネークタンに拳銃弾が命中しましたが、貫通しませんでした。骨折ありません」

「…スネークタン、物凄く痛いけど動けるよ」

△こちらサキュバスワン、送迎バスのご到着だよ。シャッター開けて▽

京香が肩を貸して、田沼を起き上がらせた。

「アイドル稼業も楽じゃないね…」

「ですね。」

…みさおさん、いいですよ」

「はくい、みなさん降りてきてー。プリーズ・ゲットオフ」

みさおが手招きし、囚われていた少女たちが降りて来た。みさおは気絶している日本人の女を背負っている。

メキシコ人が、おそろおそろ顔を上げた。

なんだか分からないが助かったらしい。

少なくとも、この銃を持った少女たちが、あの恐ろしい悪党と同じようには見えなかった。

\*

外では打ち合わせどおり2台の車がやって来ていた。2台とも特徴のない大型バンだ。

降りて来たスタッフは無言で仕事をすみやかに終えた。人質をバンに乗せ、もう一台に縛られた混血の男と組織の日本人の女、そしてあのメキシコ人が続いた。

「U<sup>ウ</sup>s<sup>ス</sup>t<sup>テ</sup>e<sup>デ</sup>d<sup>デ</sup> e<sup>ス</sup>s<sup>タ</sup>t<sup>ル</sup>a<sup>ル</sup> a<sup>キ</sup>q<sup>キ</sup>u<sup>キ</sup>i<sup>キ</sup>」

あの美しい少女が戻ってきて、車に乗せてくれる。

「B<sup>ブ</sup>u<sup>エ</sup>e<sup>ナ</sup>n<sup>ナ</sup>a<sup>ス</sup> s<sup>ス</sup>u<sup>エ</sup>e<sup>ル</sup>r<sup>テ</sup>t<sup>テ</sup>e<sup>テ</sup>」

「S<sup>シ</sup>i<sup>シ</sup>, s<sup>セ</sup>e<sup>ニ</sup>n<sup>ヨ</sup>o<sup>リ</sup>r<sup>リ</sup>i<sup>タ</sup>t<sup>タ</sup>a<sup>タ</sup>. t<sup>ト</sup>u<sup>ウ</sup> t<sup>タ</sup>a<sup>ン</sup>m<sup>ビ</sup>b<sup>エ</sup>i<sup>エン</sup>e<sup>ン</sup>n<sup>ン</sup>」

メキシコ人は血まみれの少女に感謝した。

もし無事に解放されたら、今度こそ母国へ帰ろう。

4人の少女と青年は2台のバンを見送った。

「…さあて、やっと仕事が終わった」

スネークタンが息をつく。

「一息つきたいだろうが、朗報だ。今パトカーがそつちに向かつてる。30秒以内に出発しろ。カーチェイスはやりたくないだろう」

「言われなくても」

5人はすみやかに今は黒塗りのバンへ乗り込み、静かに去って行った。風が遠くのサイレンを届けてくる。

あとには多数の死体と車が残されていた。

\*

「人質・捕虜・エージェントを乗せた各車両、発進しました。目的地へ移動中」

司令室のオペレーターが告げる。

コマンダー  
司令官は聞いた。

「警察の動きは」

「付近住民の通報で現場に到着しました。各車両との接触ありません」

「作戦を目撃した情報、インターネットに流れていません。撮影や動画もアップされていません」

「72時間ネット情報の監視を継続しろ。今回の作戦に関連するキーワードは永続的に監視対象となる。検索されたキーワードを逆探知させろ」

「了解しました」

「回収した人質と捕虜は」

「どちらも無傷です。心的外傷ストレスを受ける危険性はありますが、生命に関わる損傷はありません」

「司令官よりマジシャンへ。事後処理はどうなっている」

△こちらマジシャン。アクセスした防犯カメラの記録映像は抹消した。作戦行動は何も映っていない。通常の風景が映されているだけだ。誰かが捏造に気がついてても、元画像は発見できない▽

「司令官よりスネークタンへ。各員は無事か」

△こちらスネークタン、全員無事です。まあ無傷とはいきませんが▽

「負傷した者は」

△部屋へ突入する時、グレネードの破片を浴びたくらいです▽

△こちらサキュバスツ、破片は残っていません。すべて排除されました▽

「おまえはどうだ、スネークタン？」

△内出血くらいしているかもしれませんが、貫通銃創じゃないし、平気です

▽

「駄目だ。到着したら医療スタッフに診てもらえ。自己診断はあてにならない」

△スネークタン、了解<sup>コヒー</sup>▽

「みんな、よくやった。人質を全員生きのまま回収し、犯罪組織のアジトを殲滅した。作戦は成功だ」

△あゝ、ちよつと待った。サキユバスワンだけど、報酬はどうなってるの？

▽

△おい、今それを聞くタイミングか？▽

マジシャンがツツコむ。

\*

「え？だって肝心なことだよな？ただ働きはいけないな。どこかのブルック企業じゃないんだからさあ」

ビルの屋上で狙撃銃を分解しながら、のり子が言った。

大きめのギターケースに部品を仕舞ってゆく。ケースの中はスポンジで仕切られていて、銃身やレシーバーをすっぽり収めた。

司令官の声がある。

△各員の口座に3万ドルを入金しておいた▽

「え、たったそれだけ！？ やつすいな…」

△わめくな。本業はアイドルなんだろう？▽

「アイドルで食ってけないから聞いてるんだけど。っていうかさ、人を殺させておいてボランティアあって、どういう理屈よ？ 国際犯罪組織に喧嘩売ってたんだから、もう少し貰ってもよくない？」

△CEOに言えよ。コマンダーに文句言つてどうすんだ▽

△サキユバスワン、おまえの発言は伝えておく。今は安全に撤退することだ  
けを考えろ▽

「アイアイ、了解。<sup>コピー</sup> んじゃ通信切るよ〜」

ヘッドセットを外してバックパックに入れる。タクティカルベルトはその  
ままだ。

銃に着けていたガムを噛みながら、プーと膨らませる。そして落ちている  
空薬莖を拾った。

最後に周囲を注意深く見回す。

まさかと思うが、グローブを嵌<sup>は</sup>めているから指紋は残らない。誰かが探し  
ても証拠はない。

気になるのは警察の方だ。

現場に到着したパトカーから2人の警官が見回っている。すぐに増援が来るはずだ。もし、勘の鋭い警官がいて、死体が狙撃されていることに気づいたら、このビルに注意を向ける可能性は高い。ここが絶好のポイントだからだ。

のり子は鼻歌をうたいながら階段をすばやく駆け下りていった。エレベーターはとつくに停まっている。

裏口のドアを開け、さも当然のようにビルから出て歩き始める。あからさまに目配りはしない。視界の隅で観察する訓練は受けている。

そのまま表通りへ出て、深夜の街を進んだ。

と、ちよつとしたハプニングが起こった。

「…きみ、ちよつと。待ちなさい」

振り返ると、年配の警察官と若年のとが、ふたりでのり子を呼び止めた。

(げ)

と内心思ったが、おくびにも出さない。「？」とキョトンとした顔で立ち止まった。

「それ、なんだね」

年配が歩きながら、腰の拳銃を指差す。

「…あ、これ？」

のり子が拳銃を抜いた。

パステルピンクとグレーで塗り分けられたグロック ナインティーン 19 に似たハンド

ガン。弾倉に15発の銃弾が収まっている。

「そういう物を持ち歩かないで」

「え、やだなあ。オモチャですよ、これ」

いけしゃあしゃあとのり子がとぼけた。

そして拳銃を掌に載せ、警察官に差し出す。

「ほら」

年配が拳銃を持った。

ズシリと重い。

それもそのはず、銃と弾薬で一キログラム近い重量がある。

「本物じゃあないのか？」

しげしげと眺め、銃をいじくった。

動かない。

引き金も、マガジンキャッチボタンも、スライドも。

一応銃の取り扱いの訓練を受けているようだが、あまりにも無造作な手つきに、のり子は内心ヒヤヒヤした。

「おじさん、本気で言ってる？ 女子高生が本物持ち歩くはずないじゃないの」

「じゃ、なんで持ってるんだ」

「ファッション。わかんないかな、ミリタリールックって」

「最近はやバゲー流行ってますからね、女の子でも」

若年が口を挟んだ。

「サバゲー？」

「サバイバルゲーム。ほら、モデルガンでBB弾を発射して…プラスチックの」

「あんたもやるのか？」

と、のり子を見る。

「ちよつとね。ま、でも、それはルックス。カッコいいでしょ」

「はあゝん…ルックスね」

年配が鼻を鳴らした。

「見てよ、銃口んとこ。撃てないでしょ」

グロックの銃口を指差す。年配が覗き込んだ。

銃弾が飛び出す穴を、何かが塞いでいる。

インサートだ。

弾が出ないように金属の板がはめ込まれていた。

（うわ、トリガーに指掛けながら覗くなよ、おっさん）

あまりにも無用心な警察官に、のり子は心配になった。

（まあ、そんだけこの辺は平和なんだろうけど）

「…ふうん、今どきのモデルガンってのは変わってんだな」

年配が銃を返した。

「だけどあれだ、銃刀法とか、誤解されるから家に仕舞っておきなさい」

「はい」

受け取ったのり子の指紋を認証システムが感知した瞬間、銃身のインサー  
トがスツと引っ込められ、引き金と弾倉マガジンボタンとスライドが解除された。  
のり子たちの指紋以外、銃は一切の動作を拒むこぼ。

「お仕事、お疲れ様です」

「ちよつと待って。まだ話がある。なんでこんな夜中に歩出てるんだ。親  
御さんが心配するぞ」

「そうですね。この時刻じゃ街中は危ないし」

この平々凡々で素朴な正義感のある警察官たちへ、のり子はほんのり好感  
を抱いた。

世界を守るのは、こういう平凡な人たちだ。

のり子は肩を竦めた。

「これでも仕事やってんだけど」

「仕事？ コンビニの？」

「いや、アイドル」

「アイドルう？」

「『レッドサキュバス』って名前知りません？」

「いや」

「クラウンカンパニーって会社について、グループ組んでるんですよ。今夜はライブのための練習」

「…ああ、ライブね」

若年がうなずく。

「なんだい、ライブって」

なんとなく面白くなさそうに年配が聞いた。

「最近でもないけど、けっこう活動してますよ、女子高生でも。地下アイドルとかね」

「そうそう、それ系」

「地下アイドルってなんだ」

「ライブ会場がたいいてい地下にあるんで、『地下アイドル』。素人でもデビューしやすくって。配信とか自分でやってますよ」

「テレビに出ないのか」

「そこまで売れてませんって」とのり子。

「地下アイドルは地下アイドルで別のジャンル組んでるんです。ファンもけっこういますよ」

「おまえ詳しいな」

「や、ぼく、休みの日は動画観てるんで。たまにライブ行くこともあるし」  
「はー」

全然感心したそぶりを見せない年配。

「あ、行くんですか、ライブ？ 見に来てくださいよー、【レッドサキユバ  
ス】！ かわいいどころ揃ってますから」

「キャバクラみたいだな」

年配がツッコむ。

「会社の地下でライブやってるんですー。おじさんも来たら？ 絶対面白いから」

「おじさん言うな」

「あ、じゃあ、今度調べて、暇あったら行くかな」

「本当？ やった！ 楽しいから来てみて。サービスしますぜ、旦那がた揉み手すらしそうな、のり子。」

「ちゃんと帰るんだぞ。明るい所を歩いてかなわんという表情の年配。」

「アイアイ。お仕事、お疲れ様ですっ」  
「ビシッと敬礼するのり子。」

「気をつけてー」

なんだか仲良しになった雰囲気別れる。

しかし、警官たちと別れたとたん、のり子は薄暗い裏通りへスツと入っていった。

そのまま入り組んだ道をスイスイと歩いてゆく。

途中、何度も角を曲がり、時には道を迂回さえした。そのルートに防犯カメラはない。尾行されていないのを確かめつつ、

(…さてつと、帰ったらライフルの分解・清掃だ。早く寝たいな)

あらかじめ調べておいた道順に沿って家路を辿るのだった。

\*

「大丈夫ですかねえ、あの人たち…」

バンの中でみさおがつぶやいた。

「心配ないよ。上手くやってくれるさ」

カーテン越しに田沼が応える。

「どうなるんですか？」

「そうだな。収容した人たちは、みんなこの事件の記憶を消される。例によつてフォッカー先生が担当してくれるから、確実だと思うよ」

「記憶喪失：じゃないんですよね」

「あくまでも部分的に。ぼくもよく分からないけど、そういう技術に関して、会社は凄いな」

「組織の人間はどうなりますの」

巴が質問した。

マリーからウェットタオルを受け取って、体の汚れを拭い、用意していた制服に着替える。白シャツにカーディガン、ギャザースカートと新しい黒タ

イツにパンティ。そして学生用ローファー。身に纏まとうと、さつきとはまた違った魅力を発する。

清楚なお嬢様学生の誕生だ。

「身元を確かめて、組織についての情報を引き出したら、凶悪犯以外は無罪放免だね。記憶を消して母国へ送還する」

「帰国しても組織に狙われるのでは？」

京香が言った。

「その点はぬかりない。向こうで捕虜を受け取り、身分を隠して保護するよう手筈を整えている。人質の女の子たちも同じだ」

「それならいいです」

と言いつつ、マガジンに消費した弾薬のかわりを1発ずつ込めてゆく。そしてアサルトライフルや拳銃が正常に動くかどうか念入りに確認していた。京香は基地へ帰還するまで、その手順を省いたはぶことがない。

マリーも万が一のトラブルに備えて、ショットガンの弾を込めていた。指図されているわけではないが、彼女たちは自主的に点検を怠らなかつた。

「…ま、ぼくとしちや、こういう斬った張ったより、アイドルの仕事の方が良いんだけど」

「ですよねえ」

スネークタンこと田沼の言葉に、みさおが深く同意する。

「なんてったってアイドルですからね、わたしたち」

「でも人氣ない」

ぼそりとマリーが言った。

「な!？ あ、ありますよ…そのうち」

「レコードデビューですわね」

「いや、配信でしょ、今は…巴さん、いつの生まれですか」

「リ〜ンゴ〜、かわ〜い〜やく〜、かわいやリ〜ン〜ゴ〜♪」

京香がかわいい声で歌い出す。

「なっ!?!? それ並木路子なみきみちこじゃないですか! 違いますよ、昭和歌謡じゃない、ア・イ・ド・ルツ!

ビシツとみさおがツツコみを入れた。

「いや…即答してるし」

田沼がみさおにツツコむ。

「♪あ〜かあ〜い〜リンゴお〜に、くちびい〜る寄お〜せ〜て〜♪」

巴が美声で唱和した。

「♪だ〜ま〜あ〜つて見いてえいいるう…」

「マリーちゃんまでやめてー！ わたしたちアイドルなの〜！〜！〜！」

みさおの悲痛な叫びを運びながら、暗殺者の少女たちを乗せたバンは暗闇へ消えてゆくのだった…。

「……ああ、つまらねえ」

狼男が後部座席でボヤいた。

「なんか面白えことないかあ」

だらしなく広げた足を揺する。

サイドウィンドウから外を見ると、ネオトーキョー新都心の超高層ビル越しに、長い鉛筆

の形をした高い塔のシルエットがかげろう陽炎のように見えた。完成間近の電波塔だ。

反対の方角には、かつてスカイツリーと呼ばれた電波塔の残骸が見える。

半ばからポッキリと折れても、旧電波塔は目立っていた。

「日本の縮図つてやつだな」

狼男がつぶやく。

「一度転んだのに、また立とうとしていやがる。ムダだと思わねえのかねえ」

「…おい。もつとシャキッとできないのか」

助手席のゾンビ男が唸った。

4人の男たちが乗っていた。

全員、仮装マスクを被っている。

運転手はフランケンシュタイン、後部席の狼男の隣はミイラ男。

そして武装している。

運転手以外は銃身の短いアサルトライフルを持っていた。狼男は胴回りにベルトを巻き、やたら予備のマガジンを揃えている。

「これから仕事って時に呑気な野郎だ」

ミイラ男も毒づく。

「あんたらに期待しちやいねーよ」

狼男がアサルトライフルの銃口でゴリゴリともみ上げのあたりを擦る。

「誰がためーのお守りをしてるんだよ。信じられねえな…」

ミイラ男が首を振った。

「時間だ。やるぞ」

ゾンビ男が腕時計を見て言う。

フランケンシュタインが車のキーを回しながら、

「サクッと終わらせようぜ」

エンジンを噴かし、くたびれたセダンが動き出す。年代物のアメ車だ。幅広い車体とデカイマフラーを着けている。電気自動車優勢のこのご時世に、ガソリンエンジンの排気音を咆哮させ、煙を撒き散らした。

路肩に停まっていたセダンは、他の車両を無視して6車線をまたがって強引にUターンし、クラクションを浴びながら向かいの銀行の前で急停車した。

三つのドアが同時に開き、ゾンビ男、ミイラ男、狼男が降りる。3人とも大きなダツフルバッグを肩に担いでいた。

堂々と正面から乗り込んだ男たちが窓口のロビーへ雪崩<sup>なだ</sup>れ込み、ミイラ男が銃を天井へ向けてダダダ！と乱射した。呆気に取られた人々が凍りつく。

「騒ぐな！床に伏せろ」

慣れた態度でゾンビ男が怒鳴る。そして窓口カウンターの女性従業員に銃口を突きつけた。

「ひっ」

「変な真似するなよ。…おい！支店長は誰だ」

「私ですが…」

眼鏡を掛けた50代の男がおずおずと前が出る。

「このバッグに金を入れろ。5分以内に」

「わ、私にその権限はありません。本店に聞いてみませんと…」

ゾンビ男が銃口を向けた。

「バカか？そんな手間を掛ける暇があるか。さっさとやれ」

「しかし、暗証番号が…」

ダラダラ!

支店長が吹っ飛んだ。

胸に赤い穴がポツポツと開き、血を迸ほとばしらせる。

悲鳴がロビーを満たした。

「おいっ、なにやってんだ!？」

ゾンビ男が狼男に怒鳴った。

「殺すやつがあるか、マヌケ!」

強盗は重罪だが、殺人はもつと重い。ましてや、こういう状況で射殺したとあれば、捕まれば死刑もしくは無期懲役は免れない。

しかし狼男は意に介さなかった。

「いいか、おまえら。俺が全員殺す前に金を詰める。なんでもいいから」

ダツフルバッグをカウンターの中へ放り込む。

「俺あ退屈してんだ。てめえらみてえなクソを撃つたところで面白くもなんともねえ。俺がイライラする前にやったほうが良かあねえか？」

「てめえ、イカれてんのか!？」

ミイラ男が激怒する。

「なんて真似しやがる」

「あんたらがチンタラやってっからだろ」

「これはビジネスだ! 殺しなんて聞いてねえ」

「…俺に向けんな」

狼男が横目でミイラ男の銃を見る。

「さもないとあんた、死ぬぜ」

「オレがてめえをぶっ飛ばしてやる!」

「おい、よせっ…」

ダラララララ!!!

いつの間に向けたのか、狼男のアサルトライフルが吠え、ミイラ男が穴だらけになり、床に倒れて痙攣する。

「おっと、あんたまで殺しちゃ面倒だ。さっさと終ろうぜ」

目を丸くするゾンビ男に銃口をサッと向け、のんびりした口調で言う。

床へへたり込んでいる客も、思い切り逃げ腰の従業員も、今の光景を信じられないように見つめている。

ゾンビ男は銃口を見、それから狼男を見た。

一見だらけた姿勢でいるが、反対しようものなら、ためらいなく引き金を引くだろう。

(…まいったな。完全にイカれてやがる)

マスクの奥の眼が血走ってる。

どうかすると本物の狼の眼に見えた。

手が足りないから新人を頼んだのだが…とんだ援軍だった。だから組織はあてにならない。信頼できる手下に限る。

(隙を見て殺してやる)

「…金を詰めろ」

もう従業員たちは逆らわず、慌てて3つのバッグを抱えると、奥の金庫へ飛んで行った。

…パトカーのサイレンが微かに聞こえてくる。

「誰が通報した!？」

ゾンビ男が従業員へ怒鳴った。

「正直に言え。さもないと一人ずつ殺すぞ！」

「…待てよ、面白くなってきたじゃねえか」

狼男が床から天井までであるウインドウの前へ行った。気のせいか、マスクなのに歯を剥き出して笑っているように見える。

窓を隔てて、銀行の前にパトカーが1台停まった。2人の警官が降りて来る。

狼男がアサルトライフルを持った手を親しげに振った。

警官たちはその姿に固まったが、すぐに拳銃を抜いた。

「こつちには人質がいる!下がってろ！」

ゾンビ男が警官たちに怒鳴った。声は聞こえなくても仕草で分かる。

警官たちは顔を見合わせ逡巡しゆんじゆんした。そして、パトカーを盾にしながら連絡を取ろうとする。

「あゝ、そりゃダメだ、面白くねえ」

バラタタタタ！

正面のウィンドウが盛大に砕け、その向こうのパトカーが穴だらけになる。弾を受けた車体が揺れた。

「…なにをやつてる！？」

「見りゃわかるだろ。遊んでんだよ」

マガジンを抜いて床へ捨て、新しいのと交換した。

その隙を狙ってパン！パン！と警官の拳銃が火を噴き、狼男のスーツに穴を開ける。わずかによろめいたが、狼男は蚊に刺されたほども反応しなかった。

「…なんだあ？パラベラムじゃなくて38口径か。シケてんなあ、日本の警察ってなあ…」

ダンダンダン！

めんどくさそうに警官を射殺する。無造作な動きだが、二人とも頭を撃ち抜かれていた。

ゾンビ男が肩を掴んで振り向かせる。

「…おまえ、正気か!？」

狼男が首を傾げる。

「正気の間人が銀行強盗やるかよ。あんたこそ何言ってるんだ」

「金が欲しいんじゃないのか」

「金は要る。だからここへ来た。バカか？」

「バカはおまえだ！ 警官まで殺しやがって。どうなると思ってるんだ」

「おい、金詰めてつかあ？」

「聞けよ！」

「…さあな。どうなる？」

答えは、多数のサイレンだった。

「よしよし。そうこなくつちやなあ！」

狼男が歯を剥き出した。

「俺ああつちを殺<sup>や</sup>る。あんたは金を持ってきな」

いつの間にかリーダー役になっていた。

「…ちくしょう！」

毒づきながらゾンビ男がカウンターへ行った。

狼男は砕けたウインドウの前に仁王立ちしていた。

2台：3台：4台：全部で9台ものパトカーが銀行前を塞ぐ。自らバリケードになって阻止しようというのだ。

《きみたちは完全に包囲されている》

スピーカーを持った刑事が言わでもがなの事を言う。

《武器を捨てて人質を解放しなさい》

狼男はニヤニヤ笑ったままだ。

パトカーのバリケードから、一人の男が進み出た。制服を着ているが警官ではない。ネゴシエーター交渉人だ。武器を持っていないことを示すために両手を上げている。

「狙いはなんだ」

「金に決まってるんだろ」

「要求があれば聞こう」

「あんたに用はねーよ」

うんざりしたように狼男が言う。

「もう逃げ道はないぞ。人質を解放した方がいい」

「悪いな。もう一人殺しちまった。この後も殺<sup>や</sup>る予定だ」

「…余計なことを言うな！」

カウンターの奥で札束の詰まったダツフルバッグを担ぎながら、ゾンビ男が吐き捨てた。

「私がそちらへ行こう。人質と引き換えに」

「なんで」

「私を捕まえておけば警察は撃たない。君たちは安全だ」

「それじゃ意味ねーんだよ」

「なに？」

「意味ねーって言ってんだ。あのな、なんでわざわざお巡りを撃つたと思う？」

「反撃か」

「あんたらがウジャウジャ集まってくつからだよ。…それよりいいのか？  
あんた、丸腰だぜ…」

交渉人と狼男の目が合った。

男が口を開ける。

とつさに身を投げる交渉人へ、バラバラ！狼男が弾の雨を降らせた。空中で交渉人の体が捻れ、バウンドしながら地面を転がってゆく。

指揮官役の刑事が叫んだ。

「奴は狂ってる、撃て！」

警官たちが一斉に拳銃を発砲した。ガラ空きのウインドウの中へ夥しい数の銃弾が飛び込む。再び悲鳴が上がり、客たちが床へ這いつくばった。

多数の弾丸を受けても、狼男は倒れなかった。シャワーを浴びるように撃たれるまま揺れている。そして、

パン…

向かいのビルから銃声がして、ようやく床へ転がる。

ゴロゴロと派手に。

「撃ち方やめ！ 撃ち方やめ！」

しいん……と静まり返った。

硝煙のいがらっぽいや臭いが漂い、警官たちが固まっている。

まるで芝居のワンシーンのように、銀行の中も外も、人々がマネキンのごとく動かなかった。

「……………うふっ」

ピクリ、と狼男が動く。

黒いスーツを流れる血で汚して。

そして唐突に背をひきつらせると、ゲラゲラと爆笑した。

それを見ている人間たちの顔は真っ青だ。

ビュン！

という勢いで、いきなり立ち上がった。

「こうこなくつちやなあ…」

鋭い爪の生えた人差し指を上げ、

「やっぱ30口径の弾でなけりや効かないぜえ」

側頭部に開いた穴へ突っ込んだ。

そして指をもぞもぞさせると、血まみれの潰れた弾丸を取り出した。

冗談のような光景だ。

普通なら死んでいる。

だが、狼男は痛がりもせず、震えるような歓喜に浸<sup>ひた</sup>っていた。

「やっばさあ、殺し合いつてえのは、お互い傷つき合わなくっちゃあな！  
一方が殺しても、もう一方が殺されるだけじゃゲームにならねえ！な！？  
わかるだろ！！？」

まくしたてると、

「んじや、俺のターンだ！」

バラバラララッ！！！！

アサルトライフルが吠えた。銃口から鉄の雨を降らせながら、人だろようと車だろうと見境なしに撃ちまくる。7・62ミリの徹甲弾がやすやすとパトカーの車体を貫通し、後ろにいた警官ごと破壊する。

「おらおらおらおら！楽しいなあああ！！！」



すぐに弾切れを起こしては、胴回りの予備マガジンを抜き、また撃った。

口からヨダレを流さんばかりに牙を剥いている。

もちろん警官たちも撃たれるばかりではなく、狼男がマガジンを交換する隙を突いて反撃するが、相手はカエルの面に水だ。当たっても当たっても止まらない。かえって五月雨さみだれ式にお返しかえりの弾が来る。

さすがに滅多撃ちのおかげで全部のマガジンを使い尽くすが、狼男はアサルトライフルを捨てて腰の両脇に下げていた拳銃を両手にひつつかんだ。50口径のバカでかい弾を発射する大型拳銃だ。

「ひよっほう！」

トン、と軽く飛び上がる。

それだけで7、8メートルの距離を跳んでいた。

勢い余ってパトカーの頭上を越えそうになる。

ダン！と最前列の穴だらけになったパトカーのボンネットに降り、そこから見える警官を撃ちまくった。そしてまたジャンプし、後列のパトカーの上を飛び過ぎながら、

パアン！

驚愕しながら見上げている警官の額を撃ち抜く。

狼男は義経の八艘やうぶね飛びよろしく、パトカーからパトカーへ飛び移り、そのたびに撃った。二丁拳銃なのに狙いは正確で、器用に左右の拳銃を当てている。

…トン。

最後尾まで達すると、地面に降り立つ。

拳銃のトリガーガードに指を入れてクルクル回し、いきなりしゃがみ込んだ。  
だ。

「だーれだ♪」

パトカーの下に隠れていた警官へ、パン！

「かくれんぼじゃねえんだからよ」

つぶやきながら周囲を見回す。銀行前に散乱した死体と車の残骸には目もくれない。

と、体の向きを変え、一角を見つめた。

パシッ！

すぐそばの地面が小さく弾けた。

狙撃が失敗する。

あまりの損害に動転したのか。

それとも目の前の惨劇が信じられなかったのか。

狼男は、ゆつくりと拳銃を片手で持ち上げ、狙いを定めた。かなりの距離がある。

少なくとも100メートルは固い。

そのビルの屋上に身を伏せている狙撃手の額目掛けて、

…ドンッ！

撃ったままの姿勢で見上げている。…それから腕をブランと下げると、

「…ああ、つまんねえ。もう終わりか…」

空を仰ぐのだった。

「よう。そっちはいいか」

「ああ。金ならこのとおりだ」

パンパンになった三つのダツフルバッグをゾンビ男が示す。

「なあ、おまえ、言っとくがな、」

「はい、ご苦労さん」

ドン！

あっさりゾンビ男が倒れた。

物足りないように狼男が銀行にいる者たちを眺める。「ひっ」という押し殺した悲鳴。

しかし、狼男が引き金を引いても、カチッと空撃ちするだけだった。

「…ちっ」

そのタイミングでアメ車が急ブレーキを掛けて、銀行前の歩道に停まる。

「早く乗れ！」

フランケンシュタインが怒鳴った。

狼男は急がず、鷹揚な態度でバッグを運び、後部席へ放り込むと、助手席に乗り込んだ。

「あなたのおかげで現場から離れてた。計画がめっちゃくちゃだ！」

「喚くな。耳が痛え」

「なんで仲間を殺った!？」

「ごちやごちやうるせえから」

ハッとフランケンシュタインが口を閉じる。

狼男はさもダルそうに、穴だらけの黒スーツを座席にもたせかけた。

「あんたは殺さねえ。運転するやつがないからな。…出ないのか？」

慌ててフランケンシュタインがキーを回す。エンジンはなかなか点かなかった。ようやくマフラーが吠えようと、大きな車体が億劫おっくうそうに動き出す。

「安全運転でな。法律はちゃんと守らなくちゃあ。速度制限以下、赤信号は停止。右折する時は確認を……」

「黙ってろ、この野郎！ 気が散るんだよ」

「落ち着け。金は山分けだ」

「いらねえ」

「は？」

「あんたみたいなサイコ野郎に関わってちゃ、命が幾つあっても足りやしねえ。全部やるから、とつとと消え失せろ。逃げ延びたら、俺は足を洗う」

ポカン……と狼男が見つめる。

そして腹を抱えて笑い出した。引き攣つれたように体を振る。

「い、今の、今日一番ウケたぜ!!!!」

「笑つてろ!」

狂ったように笑う狼男を乗せながら、アメ車は裏道伝いに走り過ぎて行つた。

(早くこのポンコツを捨てて、新しいのに乗り換えないと…)

ヘリが追って来ないか上空を気にしながら、フランケンシュタインはハンドルを必死で操った。

もちろんこの狂人を同乗させるつもりはない。

人間離れした怪物など、仲間でもなんでもない。

● レッドサキユバス

！ドンドンチャツツツ！！！！！！  
！ドンドンチャツツツ！！！！！！  
！ドンドンチャツツツ！！！！！！

強烈な足音と拍手。

それがライブ会場に響く。

地下だ。

地下のライブ会場で、少女たちが踊っていた。

狭い会場であった。

50人も入れば満員になってしまう。

座席はない。

折り畳み椅子が壁際で休憩用に並べられているが、立ち見だ。

距離が近い。

ステージの高さは50センチもない。

ほとんど目と鼻の先。

そのステージの上で、5人の少女が並び、いつせいに足で床を踏んでいた。

踏み抜く勢いだ。

そして、踏むと同時に手を叩く。









しかし、ひとりひとりの声量が大きく、華奢な外見とは裏腹に腹へ響く声を出す。

歌いながら足のドラムをぶつ叩く。

そして「We will we will rock you」を何度も何度も連呼した。

シンプルな曲だ。

血が沸き立つような歌だ。

♪！ジャーーーーーン！！！！！！♪

少女たちの背後でエレキギターが吠える。

胡麻塩頭ごましおで、小さい口髭を生

やした年配の男が、超絶のギターテクを披露した。



もう退職したような老人や、スカーフを巻いた上品なファッションの老女もいたりする。そして、こういう人たちはたいてい「we will rock you」が歌えた。

！ドンドンチャツツ！！が激しくなつてゆく。

みんなが手を合わせ、足をドンドン踏んで、叫び始める。

そうなると会場自体がドラム化したように凄まじい反響が生じた。骨の髄まで震わせる合唱。

何度も何度も叫んで、ようやく歌が終わると、自然に拍手と口笛が生まれた。

のり子が進み出て軽く手を振り、

「……はい、ども、【レッドサキュバス】ですー。みなさん、こんばんはー！ー！」

「「こんばんはー！ー！ー！」」

「おおー、いいねえ、いいねえ、今日のお客さんはピチピチでえ…ヒートアップしたかー!？」

「おおー!と応える声。」

「盛り上がり最高う！」

…えー、今のはね、伝説のロックバンド『QUEEN』の、『ウィー・ウィル・ロック・ユー』という名曲でした。

知らない人もいると思うので、ちょっと解説すると、QUEENは1970年代に大活躍したバンドで、もう60年前ですけど、世界で最も人気のバンドの一つです。

でね、『We will rock you』はね、CMとかけっこう使われてて、知ってる人もいるかもしれないですけど、」

「『ボヘミアン・ラプソディー』!」

「そう!『ボヘミアン・ラプソディー』、お兄さんよく知ってるねー!映画なんですけど、QUEENのボーカリスト『フレディ・マーキュリー』、本名はファルーク・バルサラっていうんですけど、この人の生涯を描いた映画で、これがねく…めっちゃ面白いの!一回騙されたと思って観てください。」

でね、今夜は、このQUEENを歌っちゃおうかなと思うんですけど、」

パチパチパチ!

「あはは!もうやる気満々だよ。居るね、わかってる人。」

…え、初めての方もいるかと思うんで、自己紹介しますけど、わたしたちは『レッドサキュバス』っていうユニットを組んでまして、一応アイドルやつてることになってます」

「『地底』ですけどね」

すかさず、みさおがツッコみ。

客の幾人かが笑った。

「みさちん、それ言っちゃダメじゃん！」

「ふつうは地下アイドルですけど、わたしたちはカバー曲しか演<sup>や</sup>らないんで、地底なんです。地下よりもつと下」

「はいはい解説ありがとね。そういうことで、古い、今ではあまり知らないかもしれない歌をね、やらせてもらってます。なぜかっていうと、今はほら、色々めっちゃあって、数え切れないほどあるじゃないですか。でもお、

昔のもね、良い曲がたつくさんあつて、これは歌わなきやもつたいないってことで、ま、専門つていうほどでもないけど、それが多いかなという。

で、あの、こういう名曲は上手い人じゃないと演奏できないんで、今夜は大ベテランの方々に来てもらつてますー。

まず、ギターの塩野正平さん！

ジャーン！

胡麻塩頭がかき鳴らした。

「ベースの御手洗秀慶さん！」

べべべベン♪

革ジャンの男が渋く響かせる。

「キーボードの田代美奈子さん！」

タラララン♪

若い女性が華麗に奏でる。

「ドラムの樋渡章司さん！」

ドラダダダ！

丸々と太った男がスティックを操る。

「そうそう錚々たるメンバーが集まっておりますが…ギャラ出ないって言ってるの  
に」

「QUEENなら出ないわけにいかないよね」

と塩野。

「出ますか」

「出ます」

「お金になりませんか？」

「うーん、QUEENを演<sup>や</sup>ろうっていう人、あまりいませんから。こういう会場でね、お客さんが来てくださって…ありがとうございます」

客席から拍手。

「…ま、こういうふうな好き者が集まって、QUEENを歌いまくろうっていう企画なんですけど。」

でね、あたしたちですけど、まずあたしの隣にいるタヌキ顔が、

相沢<sup>あいざわ</sup>みさおちやーん！」

「こーら！」

みさおが挨拶しながら軽く睨む。

「わたしアイドルなんですけど、一応」

「だよね？」

で、その隣にいる美少女が、

ときわともえ  
常盤巴ちゃん！」

巴が長い髪を揺らし、楚々<sup>そそ</sup>として丁寧にお辞儀する。

「次が、

マリー・マトムールちゃん！」

マリーは特になにもしない。

ちよつと前へ出るだけだ。

しかし後方から「マリーちゃん！」と誰かが叫ぶと、ちよつとだけ手を挙げた。それが独特のかわいらしきがある。

みかみぎよつか  
「三上京香ちゃん！」

「はい」

京香がかわいく返事した。また声援が飛ぶ。

「そしてえ、わたくし、リーダーをやらせてもらっています、

本衣もといのり子でございまーす！」

拍手に応えながらメンバーに合図する。

「ま、子供ジャリばつかですけど、がんばって歌わせていただきますんで、よろしく。みなさんもね、今夜お配りしたレジメを見て、一緒に歌ってくれたら嬉しいなつて」

客の手元には手作りのパンフレットが握られていた。

今夜のメニューの歌詞と、カタカナの発音と、対訳が刷られている。

「わかんないとか恥ずかしいつて人は、」

ダンダン！

「よく鳴るでしょ、この床。これでね、え、一緒に参加してくれたらと思いまーす。

…では、次はあ、これも名曲の『レRadio イGa オGa ガ』。現在ご活躍中のレディー・ガガさんの名前の由来になったという。

昔はトランジスタとか、ダイヤル式の古いラジオで、ラジオ局に合わせる時にガーガーラジオが言ってたってことなんですけど、」

タン♪タン♪タン♪

ドラムの軽いリズム。

「…♪ アイドId スイツsit アalone、

アンドand ワツwatch ユyour ライlight…」

のり子が腰を振りながら軽快に歌い出す。

それに合わせて残りの4人がダンスし、それぞれのパートをかわるがわる歌った。

歌詞から歌詞へスイッチしつつ、本来は男の声であるのを、少女特有の音声で巧みに再現し、オリジナルとはまた違った魅力を発している。

何も知らなかった観客さえ次第に惹き込まれてゆく。

いつの間にかライブ会場が一体になり、異様な熱気に包まれていった…。

\*

「まずまずつてところね」

舞台袖で眼鏡美女がうなずいた。

パープルのド派手なスーツに身を固め、髪をひつつめになっている。スーツの下から隠しようもないほど胸がせり上がっていた。顔は童顔に近く、唇に紅いルージュをひいていても、どこか幼さを残す。

それでいて垂れ目に近い大きな眼と、くびれた見事な体型が色つぽさを醸し出している。

「そうですね」

隣に立っているスネークタンこと田沼もうなずく。

「この路線ならいけるんじゃない、沖次くん？」

「いや、あくまで単発ライブですから」

スリーピースのスーツを着こなしながら、田沼沖次たぬまおきつぐは首を振った。

今回のライブはクラウンカンパニーの本社ビルの地下で行われている。

事前の告知もなく、ただ開演当日の朝から喫茶店が出すような立て看を入り口の脇へ置き、チョークで黒板にライブの内容を書いたただけだ。いろいろ

な色のチョコレートで『レッドサキユバス地下ライブ今日開演！完全無料！今夜はQUEENさんまい！集え戦士たちよ！』と花丸で囲って。

書いたのは他ならぬ京香たちだ。

「有名になるのは会社の本意ではないですし。…ですよね、川島さん？」

「そうね〜…」

残念そうに眼鏡美女こと川島アヤメが首を傾げる。

「この子たちなら売れると思うんだけど」

「アイドルは仮の身分ですよ」

「まあ、そういうことね」

ため息をつきながらアヤメは同意した。

「沖次くんのマネージャーも仮初の姿だものね」

「ほとんど本職ですけどね」

田沼が苦笑した。

マネージャーの田沼は、五人の少女たちを引率する世話役だ。会場まで車を運転したり、ライブでスタッフとの打ち合わせや、会場の設置、安全確認、スケジュール管理、仕事先の挨拶まわりなど、雑用を一手に引き受けている。修学旅行で学生を引率する先生に近い。

年柄年中アイドルたちに合わせ、私生活は制限されている。

もちろん、恋愛関係など論外だ。

そういう感情が入る余地もないほど忙しい。

「…で、こないだの救出、結局【エース】じゃなかったんですって？」

声を低めるアヤメ。

田沼が微かに暗い顔をした。

「ええ」

「なんのための作戦だったの？」

川島アヤメの表向きの肩書は『アシスタント・プロデューサー』だ。

クラウンカンパニーのメインプロデューサーでもある、あさいぎいちろう浅井義一郎CEOに代わって現場を仕切ることになっているが、実質、彼女がメインであるといつても過言ではない。

レッドサキュバスの表向きの仕事を取ってくるのはアヤメの仕事だし、浅井はチェアマンとしての役目がある。

それゆえ、京香たちの裏の顔も知っているが、直接作戦に関わってはいない。

しかし、少女たちの面倒をみる責任者としては、裏の仕事も知っておく必要があった。

アイドルという隠れ蓑を最大限に活かすには、表の『きれいな仕事』と連携させるため、最低限の情報は得ておかなければいけない。

「チエアマンが言うには【百人会】からの要請だそうです」

百人会は会社の大手スポンサーだった。

むろん、まっとうな仕事という意味ではなく。

「百人会ということは、なにかエース絡みの情報を嗅ぎつけたってことでしょうね」

「たぶん」

「人質は無事だったの？」

「帰国させられる者は故郷へ帰し、出来なかった人はこっちで再教育してま  
す」

人質の中には、内戦で国を追われた者もいる。

祖国で生きられないからこそ、あえて怪しげな移民計画に乗り、有り金をはたいて日本へ来るのだ。

しかし、日本が天国でないことも、また確かだった。

入国管理局に引つ掛かって拘束されたり、強制送還される方はまだましかもしれない。

中には、犯罪組織の手の中へ送られ、そのまま闇の彼方へ消えてゆく不運な者もいる。

仮に無事入国できたとしても、日本語が話せない違法移民の生活は困難を極めた。安い仕事にしか就けず、十分な行政の支援も受けられない。

日本だからというわけではなく、移民というのは、そういうものだ。

それでも故郷で殺されるのを待つよりはましだった。

むしろ、田沼たちに救われた人質は幸運だったと言えるかもしれない。

彼女たちは事件の忌まわしい記憶を抜かれた後、言語プログラムや就活訓練を受け、日本ばかりでなく適切な環境であればどの国へでも送られる。

そして帰国した者たちも、再び犯罪組織の餌食にならないため、隠れ家と別の身分を与えられ、保護観察されることになる。

田沼は肩を竦めた。

「…ま、慈善事業ではないですし。うちの情報を流されても困りますからね。やる以上は最後までやりますよ」

そのための費用は莫大な額に昇る。クライアントから巨額の報酬を受け取つても、9割方はそちらへ持っていかれ、純益はほとんどない。

「取引先の相手は誰だったの」

「『伏龍鳳雛会』だそうです。最近のしあがってきたヤクザですよ。外国人を沢山雇ってます。今どきはヤクザでも日本人オンリーの団体は少数派ですね。たいていは中国やフィリピンのギャングとつるんです。

伏龍鳳雛会は仲買人で、さらわれた女の子たちを買い取って、金持ちの顧客に高値で売りつけるんです」

「怖い人たちねえ」

全然怖くなさそうにアヤメが言う。

「その人たちとは揉めないのかしら」

「どうですかね。作戦は単発物でしたし。証拠は残しませんでしたから。それに、人間相手にあの娘たちを使うのは……」

「そうね。そんな事には巻き込めないわ」

アヤメはうなずきつつ、

「ところで沖次くん、銀行強盗の事件は知ってる？」

「ええ」

警官が大勢殺される異常事態だそうだが、田沼には興味がない。

人間同士の争いなど向こうの世界の出来事だ。こちらには関係ない。気の毒だとは思うが、それ以上の関心はなかった。

「船橋ですよね。まだ『本土』でやってるんですね、銀行……」

「そりゃあやるわよ。だってまだ人がいるんですもの」

「確かに。で？」

「それがねえ、どうも、【エース】らしいの」

「えっ？」

田沼がステージから目を離し、振り向く。

「防犯カメラにね、映ってたんですって。パトカーを飛び越えて襲い掛かる人狼を…」

「人狼？」

「狼男のマスクを被ってたらしいんだけど、本当に狼みたいに飛び回ってたとか」

「それは知らなかった」

ポケットからスマホを取り出し、電話を掛ける。

「…ぼくだ。遼、銀行強盗があつたって話なんだけど…」

△聞いたぜ。今分析中だ▽

電話の向こうでマジシャンが即答した。

△勘違いっていうこともあるが、一応覚悟しておいた方がいいかもな▽

「そうか…。何かわかったら教えてくれ」

小さく「くそっ」と毒づきながら電話を切る。

「どうだつて？」

「まだわかりませんが：【エース】らしいです」

「そう…」

アヤメも眉をひそめた。

田沼は舞台袖からステージを見守った。

\*

キラキラに輝いている少女たちが、汗を散らせながら、歌って踊っている。

そこには、冷酷に犯罪者を射殺した面影は、微塵みじんもない。

\*

「…売れないまま思春期の3年間を人殺しで過ごすアイドル、か…」

田沼がつぶやいた。

「できれば、あのままでいて欲しいわね…」

「ええ…」

たとえ有名になれなくても、売れなくても、人を殺すよりはアイドルを演じていた方が、何万倍もましだ。

「…ああ、退屈だ」

大利根川の水面みなもがキラキラ光っている。

浅草寺せんそうから墨田区を眺めると、水没した街の中からスカイツリーの廃墟が  
そびえていた。

折れた先端部分は地上に落ちたまま、解体もされていない。ツリーへ寄り  
掛かる墓標のようだ。

「なんか面白えことないかな」

半分折れたとはいえ、300メートルを超える塔は青空を突き刺すように立っている。その基部にある大規模ショッピングセンターは2階まで水没しており、残りの3階は今だに営業している。とはいっても、廃墟と化した場所に誰かが勝手に入り込み、開いた空間に店を構えたただけだ。

公園の池に浮かぶボートのような物に船外機を付けた小舟が行き来する。

そして、まだ水没していないビルや公園の岸に乗りつけては、買い物をしてきた。そこには出店が多数あり、人で賑にぎわっている。

「なんであんなふうになったんだ…」

独り言のように男がつぶやいた。

寺の欄干にもたれている。

境内は荒れ果てていた。

かつては大勢の観光客が訪れた浅草寺も、今は雑草に覆われつつあった。

周辺の街並みもほとんどが空き家で、アスファルトの割れた道に野良犬がうろろしている。

世界中で起こった海面上昇による海進のせいで、低地が水に覆われ、大都市が水没した。そのため中心部は内陸へ移っている。

東京の場合、東京湾を大規模に埋め立てて【ネオトーキョー新都心】と改称し、市民の大半を吸収している。かつての旧東京区は山手線の外側を除いては、ほとんどが避難し、かわりにゴーストタウンと化した街へホームレスや移民、犯罪者が流れ込んでいた。

一応、旧東京区も行政区ではあるものの、半ば自治化され、警察の手もあまり届かず、治安は極めて悪い。

犯罪組織の温床だ。

こうして白昼堂々違法な取引に使われるのも、旧東京区……とりわけ水辺に近い地域ならではの光景だった。

「アリみてえだな」

対岸の人々を眺めながら、ぼんやり言う。

痩せた青年だ。

まだ少年の面影を残している。

眼が大きいわりに瞳が小さく、いわゆる三白眼。どこか眠たそうに目蓋が半分垂れている。薄い顎と頬骨の浮き出た顔。

ボサボサの頭は栗色で、一度も髪を切ったことがないように見えた。一昔前に流行ったオオカミカットに似た髪型をしている。

汚れたTシャツを薄い胸板の上から着て、サマージャケットを羽織り、穴の開いたジーンズを穿き、素足に踵かかとの潰れたスニーカーを履いている。格好など気にしてないようだ。

傍目はためには無気力な大学生といったところ。

「スカイツリーは『大災厄』後に日本のシンボルとして建設され、その後、ああいうふうになったそうだ」

隣にいた、野球帽を被った男が言った。

その後ろに3人ほど従えている。皆、薄暗い目つきだった。

どう見ても堅気かたぎの人間には見えない。

羽織っているフード付きジャケットのポケットが膨らんでいた。拳銃かな  
イフだ。

オオカミカットは緊張感のない声で聞いた。

「へー。なんで」

「爆弾テロだとよ、知らねえけど。イスラムの過激派じゃねえのか」

「イスラムってこつちにもいるんだ…」

「いるに決まってるだろう。このご時世、マフィアだってなんだっている  
さ、日本にもな」

「…ああそう。そいつら、美味しいのか？」

「は？」

「イスラム教徒ってよ、喰ったら美味しいか？」

さも当たり前のように聞いてくる。

野球帽は（こいつサイコパスか？）と思った。

「知るか。豚肉は食べないみたいだぜ」

「なんだよ、肉食わないのか。それじゃ喰っても味気ねーな」

「誰が人を喰う話をしてんだ」

「俺だよ。」

「…で、ブツはどこにあんだ？」

「オオカミカットが向き直る。」

「それなんだが…」

「野球帽は言葉を濁した。」

「もう2、3日待ってくれねえか」

「なんで」

「言い淀んだが、野球帽は渋々告白した。」

「ブツが横取りされた。アジトが襲われてな」

「ん？」

「向こうで集めた女たちがみんなかつさらわれちまった。だから今はブツがない」

「…おい。話が違うだろうが」

オオカミカットが目を細める。

足下のダツフルバッグを爪先で蹴った。

「こつちが金持ってきてんのに、ブツがないんじや話になんねえ」

「だから。うちも困ってるんだ」

「俺には関係ねえ」

「まあ、待ってくれよ。ブツはすぐにかき集める。ほんの2、3日だ。な？」

「一度約束したことを守れねー奴に言われたかねえな。この落とし前どうつけんだよ。こっちは腹空かせてんだぜ」

「…おい、調子に乗るなよ」

ズイ、と野球帽が前に出た。

ドラム缶のような肉体だ。

体格では圧倒的な差がある。

向こうはヒヨロヒヨロの青二才に過ぎない。

「ガキのくせにイキがるんじゃないやねえ。大金を持って来るから、こっちは苦労して女を集めてるんだ」

「苦労？ 女を捕まえるのにどんな手間が掛かるってんだよ」

「なあ、おまえ、どうやって金を集めてるんだ」

「銀行強盗」

後ろの3人が嘲るように笑った。

野球帽がのし掛かるように顔を近づける。

「おまえが銀行強盗……？ どう見てもそんなタマじゃねえなあ」

「臭え鼻息掛けんな」

「女と犯<sup>や</sup>りたいってだけで、どうしてこんなに金を払えるんだ？」

「『犯<sup>や</sup>る』？」

「その顔じゃあモテないから買うのか」

オオカミカットが、はあく……とため息をついた。

「誰が犯るって言った？ 喰うんだよ」

「『喰う』って？」

「ああ。若い女の肉は柔らかいからな。喰ったら美味しいぜ」

舌舐めずりしそうだ。

「普通に拐さらつてもいいけどよ、その辺の女を襲うと後が面倒なんだ、色々な。死体の始末も。おめえらみたいなのが、売れそうな女を集めるだろ。そういう上玉の肉は喰うと美味え。だからこうやって金を出す」

「おまえ…」

野球帽は言葉を失った。

オオカミカットはさも当たり前のような顔をしている。

イカれてるとは思ったが、本物の狂人か。

（人間を喰う気でいやがる）

背筋がゾツとしたが、そこは犯罪者だ。並大抵の人間とはわけが違う。ビジネスになるなら、こういう阿呆あほうも相手にしなくてはならない。

嫌悪感で口の中が苦くなった。

「…そうかい、そりゃよかった。女は3日後に連れて来る。その金は預かつとく」

「あ？」

「金を置いていけと言ってるんだ、ガキが」

拳銃をベルトの後ろから抜いて、オオカミカットの額に銃口を当てた。後ろの3人も拳銃を取り出す。

「おまえ、耳が聞こえないのか」

「耳は良い。悪いのはてめえの頭だ」

至近距離で狙われているのに、気にしたふうもない。

オオカミカットはまたため息をついた。

「…そうかい、手間あ掛けたいんだな。じゃ、しょうがねえ。あんたで我慢するか」

ドシュツ！

野球帽の背中から何かが飛び出した。

手だ。

真っ赤に染まった右手が突き出ている。

冗談のような光景だ。

S Fホラー映画じみている。

オオカミカットは肩を強く揺すり、野球帽の胸に突っ込んだ右腕を引き抜いた。ズルリ…と野球帽が崩れ落ちる。

オオカミカットの右手に、蠢く物がある。

心臓だ。

たった今、男から抜いた心臓が、ピクツ、ピクツ、と痙攣していた。

オオカミカットが「あくん」と大口を開け、それを放り込む。そしてクツチヤクツチヤと咀嚼音を立てながら、

「…やっぱ男の肉つて不味いわ」

「げえええええええつ」

手下の一人が吐いた。胃の内容物を木の床へぶち撒けている。

「汚ねえな。ちゃんと掃除しとけよ。お寺なんだから」

血で汚れた唇を舌で舐め回す。その舌も真っ赤だ。

「こっ、こっ、こっ…」

手下の一人が鶏のような声を上げる。拳銃を持つ手がガタガタ震えた。

「なんだこいつ…！」

もう一人も真っ青だ。

「いいかり、おめえら。ちゃんと3日したら持つて来いよ」

相変わらず緊張感のない声でオオカミカットが言う。

「金はくれてやつから」

ポン、とボストンバッグを蹴った。

「来なかったら、こつちから行くぜ。おめえらの匂いは覚えた。逃げても無駄だからな」

そして、初めて気がついたように3人の拳銃を見た。

「…トカレフ？ まだそんなの使ってるの？ 雑過ぎない、キミたち？ 撃ちたきや撃つてもいいけど、どうなるかはわかってるよな…？」

眠そうな目で言う。

なにもかも常軌を逸している。

今までいろんな犯罪者を見てきたが、こいつは破格だ。

野球帽の心臓を抜いた動きは全く見えなかった。

いきなり背中に腕が生えていたのだ。

こいつなら、気配を察しただけで、銃を撃つ間もなくこっちを皆殺しにしているだろう。

犯罪者3人は後ずさった。

「あ、ああ…わかった。なんとかする」

「おい、金忘れんなよ」

「あ！そつそそそうだった」

とにかく一刻でも早くこの場から逃げなくては。

「…あ、ねえ。誰にアジト襲われたの、キミたちさ」

ふと思いついたようにオオカミカットが聞く。

「さあな。取引相手の『マノス・デ・グロリア』の奴らも死んでやがった。交渉で揉めて同士討ちでもしたんじゃないか」

「女は消えちまったんだろ？」

「どさくさに紛まぎれて逃げたのかもな」

「ふうふうん……。『マノス・デ・グロリア』ねえ……？」

すぐに興味を失ったように、

「サンキュー。女忘れんなよ」

愛想よく手を振る青年は、たった今人間の心臓を食べたようには見えなかった。

その手は真つ赤に濡れていたが。

\*

浅草寺を離れて、オオカミカットは旧墨田区の界隈をぶらぶら歩いた。

腕についた血は洗い流している。

寺の手水ちよみずで汚れを落とした。水面を真つ赤に染めながら。

仲見世通り伝いに目的もなく歩いてゆく。この辺りは昔と変わらず賑やかだ。ただ、昔と違うのは店のほとんどが違法営業で、外国人の店も多いことだった。そんな中で昔からの老舗が健在だったりもする。

オオカミカットが通り過ぎてゆく。

すれ違う人々が多いが、一度も体に触らせなかった。数ミリの隙間をぬつて器用に歩く。

途中、屋台でフランクフルトを買う。ポケットに押し込んだ万札を引つ張り出し、めんどくさそうに一枚渡した。釣りは受け取らない。財布がないよ  
うだ。

フランクフルトをまずそうに食いながら歩いてゆく。

驚いたことに雷門はまだ健在だった。

赤い巨大な提灯は破れた箇所を布テープでツギハギされ、見るからに痛ましいが、それでもぶら下がっている。門の屋根瓦も地元の有志の尽力で葺き  
替えられていた。

そこから幅広になった隅田川の岸边へ向かうにつれ、だんだん人家が少なくなつてゆく。家があるにはあるが、空き家が目立ち、人通りもまばらだ。

誰かがいたとしても、ほとんどが貧しい。

家の前にたむろする刺青いれずみをほどこした男たちが、胡散臭うさんげにぼさぼさ頭の青年が通り過ぎるのをジッと見ている。

オオカミカットは気にも留めず、細い裏道を歩いてゆく。  
やがて道を曲がり、袋小路へ入り込んだ。

「おい」

オオカミカットがぴたりと足を止めた。

「いい加減出て来いや。さつきから尾おけてきやがつて  
すると、背後にトン、と降り立つ者がいる。」

オオカミカットがゆつくりと振り向いた。

スラリとした男だ。

肌は黒い。

髪はブロンド。

サングラスを掛け、オフホワイトのスーツを着ている。靴は高級ブランドのスニーカー。

年齢は二十代半ばに見える。

オオカミカットは路地の左右を見た。

道は家で塞がれている。

家はどこも閉ざされていた。ひと気はない。

隠れられそうな場所もない。

どこから現れたのか？

「あんた、『奇谷天狼』だね？」

滑らかな日本語で言う。ほとんどネイティブだ。言葉の端にほんのわずかにイントネーションが違うだけで、日本人として聞いても違和感がない。

男は笑みを浮かべ、

「噂じゃ【人狼】ウエアウルフって呼ばれてるんだって？」

明るい声で言った。

「なんでも夜な夜な街を彷徨さまよっては、人を喰べるそうだな？」

オオカミカットは反応しなかった。

ジーンズのポケットに手を突っ込み、黙って見つめている。

「惜しいな…」

「なにが」

「あんなちっぽけな銀行を襲っちゃ、稼ぎも少ないだろう？」

ぴくり、と『人狼』の頬が動いた。

すかさず男が手を上げた。

「『てめえなにもんだ』って聞いたそうだから先に言っとくが、俺はジャンつていう。仲間内じゃ【ル・パス】って呼ばれてる」

「へえ」

「あんたに用があつて」

「興味ねえな」

素っ気なく言った。

『ル・パス』は微笑み、

「まあ慌てるな。良い話だぜ」

「『良い話』にろくな話があつたためしがねえ」

「まあそうだな。普通は」

「おまえのは普通じゃねえつてのか」

「そうだ。だからわざわざ来たのさ」

「何を企んでる？」

「それについては、俺の上司と話した方が早いな」

「ヤクザか」

ル・パスはあやうく腹を抱えて笑い出すところだった。

「…おい、人間の組織なんかお呼びじゃないぜ」

「『人間』？」

「ああ」

「あんたは人間じゃないってのか」

「当たり前だ。あんたもな」

人狼が目を細める。

「ほう……………」

「自分がまともだと思ったのか？」

「思ってたねえ」

「だろうな。人を喰う奴なんて、まあ人間にもいるが、あんたほど食欲のあ  
る奴はまず人間じゃない。弾を喰らっても生きている奴もな」

「知ったような口を聞くじゃねえか」

「そりゃ知ってるさ。色々調べたからな。あんたが自分の親を喰い殺したの  
も知ってるぜ」

奇谷と呼ばれた青年が齒を剥いた。

無意識に出るらしい。

ひたひたと殺気が滲み出てくる。

それを気にするふうもなく、ル・パスは続けた。

「…まあ、それに関しちや事故だ。」

なにしろウイルスに感染したんじゃないやあな」

「『ウイルス』？」

「ああ。【メテオウイルス】。別名隕石ウイルスとも呼ばれてるが。あんた知ってるだろ？昔、病気が流行ったことを。【大災厄】カタストロフの原因になった」

「さあな。生まれる前の事件なんて知ったこっちゃねえ」

「メテオウイルスのおかげで世界中が混乱し、核戦争が起こったり、土地が海に沈んだりした。…まあ、その辺は飛ばすとして、まだあるんだよ、ウイルスは。ごく少数ながら。」

というより、ウイルスに感染して生き延びた【エース】がな」

「エース……？」

「そう。【スペードのエース】。死の象徴。最強の切り札」

初めて人狼が困惑の表情を見せる。

「おまえ、なんの話をしてる…」

「俺たちは【エース】なんだ、ウエアウルフ人狼。」

「俺たちは人間以上だ。」

「俺たちは世界を支配できる。」

「わかるか。」

「その遺伝子をおまえが受け継いでいる」

「勝手なことぬかすんじゃないよ」

「人狼が牙を剥いた。」

「人間以上？ だからなんなんだ。てめえらのようなもんがゴタクを並べるのはいいが、俺を巻き添えにするんじゃないよ」

「もう巻き込まれてるんだよ、【ウエアウルフ】…」

「うるせえ！」

右手が槍のように伸びた。

さつきの動きより速い。

まっすぐ男の心臓目掛け、突き出す。

だが…

ヒュッ！

「…なにつ!？」

手応えがなかった。

胸を突き破っているのに、スカスカだ。

背中から手が出ているのに。

「…あ、おい、このスーツ高かったんだぞ!？」



ル・パスがうろたえた。

慌ててジャケットに開いた穴を見る。

「あゝあ、こんなにしちやつて…」

「けえつつつ！」

スカッ。

横つ面を叩いたのに反応がない。

頭の中を拳が通り過ぎ、そのまま出ていった。

代わりに、砕かれたサングラスがすつつ飛んでゆく。

空気を殴ったのと変わりがない。

人狼は呆然とした。

「おい！レイバンのサングラスだぞ」

本気でル・パスは怒っていた。

サングラスの下から青い瞳が現れる。

黒い顔の美男子だ。

「…つたく、おまえみたいなのは鉄砲玉は後先考えないんだな！」

「てめえ…なにもんだ？」

はあ…とル・パスはため息をついた。

「だから、たつた今言つたろう。【エース】なんだよ、俺たちは。人間以上の存在なんだつて。」

あなたは人狼のパワー、俺は『Le<sup>ル</sup>Pa<sup>パ</sup>ss<sup>ッ</sup>e—mu<sup>ミ</sup>ra<sup>ユ</sup>il<sup>ラ</sup>le<sup>イ</sup>』、

『壁抜け男』の能力を持つてゐることだ」

「壁抜け男だあ？」

「俺の体は物体を透過するんだよ。あんたがいくら殴っても、こっちはなんともない」

「はあ〜〜ん…」

分かったような分からないような顔をする。

ル・パスは続けた。

「で、話を戻すとだ。

あんたのその異常な力は、色々な方面から狙われることになる」

「ふうん。誰だ」

「警察、公安、CIA…」

「なに？」

人狼がわずかに目を開いた。

「海外の様々な諜報機関」

「そんなのが俺に何の用だ」

「おおありさ。その力を手に入れれば、敵よりも優位に立てる。もちろん犯罪組織もあんたを狙う。そして、そんなあんたを見つけて通報し、小銭を稼ごうって連中も無数にいる。

一言でいえば、あんたは世界を敵に回すってことだ」

「そりゃたいそうな話だな。暇人が多くてよ」

少しも慌てない人狼。

「あんたをスカウトしたいって奴らは大勢出てくるだろうな」

「俺は誰のもんでもねえ。俺のもんだ」

親指で自分の胸を指す。

「それとも、従わないっていうなら殺すかもな」

「そりゃあ結構だ。退屈しねえで助かる」

「退屈？」

「近頃はよ、齒ごたえのねえ奴ばつかで、刺激がねえ。刺激がないと生きてる気がしないんだよ」

「…あんだ、生き残ろうって気はないのか」

「生き残ってどうする？ コソコソしながらクソつまんねえ人生を送るってか？ それこそごめんだけ」

「やれやれ…」

「てめえも生き残りたいって方か」

「当たり前だ。世の中にや、良い物がごまんとある」

「良い物ってなんだ」

「服、車、美味しい食い物、酒、女…」

「はん！」

「あんたにヤカスのようなもんかもしれないが、俺は気に入ってんだよ」

「そうかい。せいぜい長生きしてくれや。じゃあな」

「待て。話はこれからだ」

「なんだよ、いちいち…」

「今、齒ごたえって言ったよな。」

「会えるかもしれないぜ」

「？」

「あんたを殺す者に…」

スツ…

人狼の目が細くなった。

「へえ…」

唇が自然に引き攣れる。

牙を剥き出した狼の笑みになった。

「そりゃ誰だ」

「わからん」

「は？」

「正体はな。だが、確実にあんたを狙ってくる」

「CIAか？」

「そんな生易しいもんじゃない」

「なんだと？」

「それつらは、俺たちエースを殺すことも出来る。おそらく、最強の人間…  
いいや、バケモノだ」

「…へえ~~~~」

ニヤニヤ笑いが大きくなった。

「そいつ面白いなあ。会ってみたいぜえ。俺を殺せる奴つてのに」

「よく笑えるな…」

「ビビってんのか」

「当然だ。俺はまだ殺されたくない」

「おめえみたいなスカスカ野郎でも殺<sup>や</sup>れるつてのか？」

「ああ…その点は疑っちゃいない」

「ふん…」

ポン、とスニーカーの爪先で小石を蹴り上げると、器用にハイキックで向こうへ飛ばす。

「で、俺にそいつを殺せって？」

「詳しくは今から言う場所で聞いてくれ。俺の依頼主が話す」

「親玉か。やつと本筋に入ったな。ごちやごちや遠回りしやがつて」

「説明しなきゃ喰いつかないだろ？」

ヒルトンホテルに來い。

新宿のじゃないぞ、新都心の2区だ。

それから、その格好でのこのこ歩いて捕まるなよ。あんたの姿は防犯カメラで撮られているはずだ。警察を引き連れて来るな。目立たないように服を替えるか、こっそり見られないように來い」

「余計なお世話だ」

「受付で泊り客の名前を言え。そうすれば案内される。∴おっと、あんたにお客さんらしいぜ」

袋小路の入り口から、先ほどの刺青をした男たちが4、5人歩いてくるところだった。手に手に金属バットや鉄パイプを持って。

「待てよ。名前は」

「『島澄栄二郎』」

スウツ、とル・パスの体が突き当たりの壁から消えた。

「ちっ…」

「…おい。おまえ、何やってんだ」

先頭の男が歩きながら声を掛けてくる。金属バットをぶらぶら下げて。

「見掛けねえ顔だなあ」

男たちが狭い路地を塞ぎ、痩せっぱちの青年に迫った。

「おまえ、金持ってんだろ？ 仲見世通りで万札使ったんだってなあ。フランクフルトを買うのに」

どこからそんな情報を仕入れたのか、耳が早い。

「オレたちにも恵んでくれよ。なあ、いいだろ、お兄さん」

すると、人狼こと奇谷は、愛想のいい顔をした。

「ちようどいい。俺なあ、今機嫌がいいんだ」

「あ？」

「うれしいこと聞いたせいで、誰かぶつ殺したかったんだよ。おまえら親切だなあ」

ポカン…と聞いていた男たちの顔が、すぐに赤くなった。

「てめっ！」

ガン！

いきなり鉄パイプを人狼の頭へぶち込む。そんな勢いで振り回されたら、普通頭蓋骨が陥没する。…が、その代わりに、鉄パイプが頭の形にひん曲がっていた。

「あれ？」

「ほいつ、と」

人狼が軽く浮き上がり、右足が一瞬消えた。

旋風脚だ。

グキツ！と枝を折るような音が響き、鉄パイプごとそいつの頭部を叩き潰す。異常な速度で回された足が機関砲弾に匹敵する威力でぶつかり、男の頭蓋骨を粉碎した。顔面が陥没し、もとの顔つきが識別できないほどグチャグチャになる。

鉄パイプを持った男がユラア~~~~と大の字になって倒れた。足がピクツ、ピクツ、と蠢く。

「安い武器使つてんじゃねえよ」

人狼が歯を剥いて笑う。殴られた頭は少しも傷ついていない。

「俺を殺るなら、せめてバズーカ持つてこなくちやなあ」

「て、て、て、て、…」

その先を言えず、金属バットを持った男が立ち竦む。

人狼はクイ、クイ、と手招きした。

「それ使つて俺を殺すんだろ？ 遠慮しないでいいぜ。思いつきりいけ」

「によわら！」

その言葉に誘われるように、奇声を上げながら金属バットを振り回す。全力で叩き込んだアルミニウム合金の太い棒が、腹をまともに打った。

ガッン！

「…っ！」

岩を叩いた感触が響き、金属バットを取り落とす。

「んだよ、根性ねえな。んじゃ、こっちから行くぞ〜」

軽く左の前蹴りを放つ。

ベキンッ！！

と不気味な音がして、金属バット男の胸骨を粉碎した。頑丈な骨格が呆気なく分解され、折れた肋骨が肺に刺さる。金属バット男は血反吐へどを吐いて転げ回った。

「つげえええええええ」

「おし、次…って、ん？」

残りの3人が武器を捨てて全力で逃げるところだった。

「おい、殺し合わねえのか？」

一目散に逃げ出す悪党どもを見送りながら、人狼はボサボサの髪を掻いた。

「……まあいつか」

足下の死体など毛ほども気に掛けず、人狼ならぬ奇谷きたてんろう天狼がぶらぶら歩き出した。

\*

（危ねえ危ねえ。まともに殺り合ったら命が幾つあっても足りないぜ……）  
近くの家の屋根から隠れて見ていたル・パスが冷や汗を流す。

突き当たりの塀を能力ですり抜けた後、彼は身軽に跳んで2階の家の屋根まで猿のように登っていた。

パルクールの達人であるル・パスは人狼以上に身が軽い。

(…とはいっても、俺が実体化して攻撃する瞬間を狙われたら、ひとたまりもないな…)

ル・パスの能力は『物体透過』：壁や床や天井をすり抜け、物理攻撃を無効化するものだが、透過している時は自分もまた攻撃ができない。あくまで物理干渉を無効にするだけで、無敵というにはほど遠い。

(俺の能力は最大でも1日5分間。一度の使用はせいぜい30秒間。一撃で  
ウエアウルフ  
人狼を仕留めなきや、まず殺られる)

一般の人間よりは強い肉体を持っているとはいえ、そのレベルはプロスポーツか格闘技選手程度だ。人狼と対決するのは自殺行為だった。

(ま、俺はあくまで餌撒き係。餌に喰いついてくれればいい。正面切つて殺り合う必要はねえ)

人狼との対面を思い出して背筋がゾクゾクツとする。

「…あゝ、やだやだ。早く億万長者になりたいぜ」

愚痴をこぼし、ル・パスは軽々と2階から飛び降りると、足早に姿を消していた。

●公安7課

船橋市の海神銀行夏見支店前の通りは一騒動だった。

黄色い立ち入り禁止のテープが辺り一帯に巻かれ、赤いカラーコーンと、黄色と黒の縞模様のバーが道路を塞いでいる。

その中に9台のパトカーの残骸と、多数の警察官や流れ弾に当たった不運な市民の遺体があちこちに転がっていた。遺体はビニールを掛けられ、地面にチョークで場所をなぞられている。点々と血痕が飛び散り、鈍い銅色の葉がばら撒かれていた。それを捜査員が撮影してゆく。

銀行の正面ウィンドウは消失し、中が丸見えだ。

お約束の報道陣と野次馬が非常線の外に群がり、カメラやスマホのシャッターを切っている。上空では警察以外にもテレビ局のヘリが飛び交っていた。

『大災厄』後の海進により、埠頭付近の商店街は軒並み海に沈むか床上浸水で全滅していたが、新たに生まれた海岸線より向こうは街路が整備し直され、新しい街が出来つつある。どんな災害が起ころうと、人が生きている以上、規模の大小に関わらずそこで生活が営まれる。

夏見支店は、街の中核を担う役目を期待された銀行だった。

拡張された県道9号線沿いは、復興のシンボルとして、徐々に繁栄してゆくはずだった。

そこへきてこの事件だ。

マスクミはこの凄まじい破壊と残虐な犯行に興奮し、同時に怒ってもいた。仕事とは別に、復興へ向けて懸命な努力を続けている地域を踏みこむ行為は、日本を侮辱していると感じられたのだ。

「ご覧ください。この光景が信じられるでしょうか」

マイクを手にレポーターがまくしたてる。

「警察の力をもってしても犯人を取り逃すとは、警視庁の一大失態と言えます。今、日本の治安がどれほど低下しているのか、戦慄をもって感じざるを得ません！」

カメラのレンズへ囁みつかんばかりにまくしたてる。

「うわ、これエグいわ…」

「死体って初めて見た」

「嘘だろ、これ。映画なんじゃない？」

一方の野次馬は、被害者の心情などお構いなしに勝手な憶測を立てて、おしゃべりしながら写真を撮りまくっていた。動画を撮影し、その場でSNSへ流す輩もいる。

テレビ局のヘリからは高精密度カメラで捉えた映像がクローズアップされ、遺体にモザイクが掛かっているものの、ほぼ現場は丸見えだった。

報道規制などあつて無いようなものだ。

そんな様子を、警視庁警備部の田崎警部たざきは苦々しい思いで見っていた。

本来なら千葉県警の管轄だが、新都心とは至近にあり、しかも大規模な銃撃戦まで起こったので、対テロ専門の部署に任せるべきとの意見が通り、急遽お鉢が回ってきたのだ。

(こんな騒ぎじゃ捜査なんかできんぞ…)

本当なら周囲数十メートルに渡って一切の立ち入りを禁止し、捜査に専念すべきなのだが、こう監視の眼が多くては十分に行動できない。いつそパーテイションを立てて目隠ししたいところだが、そうなれば今度はマスコミが騒ぎ出す。

今から頭が痛い状況に呻いた時、<sup>うめ</sup>1台のフォルクスワーゲンが立ち入り禁止テープのすぐそばに停車した。

\*

「なあ、矢沢<sup>やざわ</sup>よう」

「はい」

「おめえ、転職しねえのか」

「はい？」

塗装の剥げかかった中古のフォルクスワーゲンの助手席で、年配の男が煙草に火を点けた。ライターではなく、飲み屋が配る紙マッチで。

フツツ…と白い煙を鼻から吹く。

運転席に乗っていた二十代半ばの青年が嫌そうにハンドルを回してウインドウを開けた。

「現場じゃ禁煙ですよ」

「わかってら、んなことあ」

さらに一口二口吸って、  
ひとくちふたぐち

「コレはいんのかい？」

小指を立てて見せる。

矢沢と呼ばれた青年は顔をしかめた。

美男子とはいえないが、意志の強そうな真つ直ぐな眉毛と、細面ながら頑丈そうな顎。グレーのスーツを着て紺色のネクタイを締めている。

「暇ないっす」

「色恋つてのは暇のあるなしじゃねえだろう」

「いません。てか、なんですか、辞めろつて。パワハラつすか」

「なんだそりゃ」

今どきパワハラも知らない男。

「大延おおのべさん。俺が力不足なら言つてください。異動を願いますから」

ふ、ふ、ふ…大延が笑つた。

薄い頭髮に白い物が混じっている。やたらに長い顎と、ドングリみみたいな小さな眼。目尻の皺しわが深い。額に横筋が何本か走っている。

「矢沢よう、おめえ、なんも分かつてねえな」

「何がです」

「7課へ来るってことはよ、もう行き止まりってことよ」

スパスパ煙草を吸いながら、にべもなく言う。

「おめえがどんだけ優秀でも、日の目を見ることはねえんだよ、警察の中じゃな」

矢沢が公安7課へ転属になったのは半年前だ。

ある事件がきっかけで、捜査一課を追われたのだ。

表向きは栄転ということになっているが、事情を知っている者なら誰もが島流しであるのを理解していた。

「7課でのし上がってみせますよ」

健全な野心を見せる矢沢に、年老いた警部は微笑を漏らした。

「そりゃ結構。…だがなあ、うちでいくら頑張ったって、上は認めちゃくれねえよ。そういう部署ところなんだよ、ここはな」

いくぶん苦い顔つきで煙を吐く。

「だからさ。まだ26だろ？ 潰し効くだろ。辞めるんなら今のうちだぜ。

警備員とか、探偵とか、口はいくらでもあらあな。頭良いんだろ、おめえ」

矢沢は警察大学校の出身者だ。

交番の巡査をしている時から、忙しい合間をぬって勉強に励んできた。試験を上位で合格し、優秀な成績で卒業している。不運な事件がなければ、エリートコースへ乗るはずだった。

「そういう大延さんはどうして居るんすか」

「俺あ、おめえ、こう…だからな」

手を水平にして顎の下を叩き、『首までどっぷり浸かつてる』ことを示した。

「見過ぎちまつたらさ、抜けられねえのよ」

「何からですか」

「言つちまつたら戻れないだろ」

「嫌ですな」

矢沢はキツパリと言った。

「納得できないことであれこれ言われるのは、嫌いなんすよ、俺」

大延は唇を噛み、うれいような苦いような、複雑な顔をした。そして備え付けの灰皿へ煙草を乱暴に押しつけ、

「後悔するなよ」

とドアを開けて外へ出た。

\*

「よう、田崎。精が出るなあ」

大延が勝手に黄色いテープを上げて、くぐつてきた。矢沢も続く。振り返った田崎警部が苦い顔をする。

「…なんだ、長さんちやうか。地獄耳だな」

「そう嫌そうな顔するな。一課のよしみじゃねえか」

「あんたはそうでも、こつちはそうじゃない」

「『長さん』？」

「いかりや長介に似てんだよ、こいつ」

矢沢の疑問に答える。

伝説のコメディアンを知らない矢沢は「は？」という顔をした。

「それか、ジャイアント馬場な。馬みたいな面してるだろ」

「やめろつて。なにが長さんだよ」

大延が虫を払うように手を振る。

そして矢沢を指差した。

「こいつな、矢沢友也やざわともやつてんだ。一課から流されてきやがった」

「へええ。そりゃ気の毒に」

田崎が相槌あいづちを打つ。

「こいつに関わつちや、あんた、出世は無理だ」

「おきやあがれ。…で、どうよ。何か進展あったかい」

「いや、それがな…どうにも」

腕を組んで、はあく…とため息。

「犯人は防犯に映ってるんですよね」

「そうだよ。だけど、ちよつとな…まあ、見てくれとしか」

「覗いていいかい？」

「ダメって言つても、あんたならゴリ押しするだろ。だけど、現場は警備部ちのもんだからな。隠し事すんじゃないぞ。公安は隠し事好きだろうが」

「あいよ、見つけたらちゃんとして教えてやるって」

ひょうひょう  
飄々と大延が現場へ入り込んで行った。

「…誰ですか？」

同僚の若手刑事が田崎に聞いた。

田崎は苦虫を噛み潰した顔で、

「公安7課の大延おおのべたいちろう太郎。名物男だ。危ないから疫病神やくびようかみには関わるなよ」

「聞こえてんぞくく…」

\*

大延と矢沢は事件現場へ入った。

穴だらけになったパトカーを見て回り、銀行から撃った射線や、犯人がどう動いたのか確かめてゆく。

「…大延さん、おかしいつすよ、これ」

「何がだい」

「ここ。見てください」

フロントドアの脇、車体枠に開いた穴を指差す。

「貫通してます」

「だから？」

「報告では、拳銃で撃つたって聞いてるんですけど」

「そう言ってたな」

「拳銃の弾でこれは開かないつす」

「うん？」

「長さんじゃあないの」

鑑識の年配の捜査員が近づいてくる。

「珍しいね」

「ほその細野さん、何か分かったかい？」

「いや、それがさ、ちよつとねえ…」

言葉を濁す。

「あもう。矢沢つていいいます」

ペコリと頭を下げた。

「あ、新人さん？」

「そうなんだよ。うちへ送るなって上に言ってるのによお」

「そうなんだ。そりゃ長さんも助かるねえ」

眼鏡を掛けた人のよさそうな笑みを見せる。

「この人、偏屈だけど、勉強になるよ」

「偏屈は余計だよ」

「あの。これ、拳銃じゃないですよね……？」

さっきの穴を示した。

細野が眉をひそめる。

「ああ、それ、拳銃なんだ」

「え？でも、こっこ、ピラーですよね」

「そうなんだ、そこはね。強装弾でも撃つたのか……」

「細野さん。俺、銃は詳しくねえんだ」

「矛盾してるんだよ、長さん」

細野が説明する。

「この穴の大きさからすると、50口径：直径が12・7ミリの弾がね、貫通したはずなんだ。だけどき、こんな硬いところに開かないわけ、普通」

拾った弾丸を掌に転がしてみせる。もちろん手袋は嵌めている。

潰れた弾頭が鈍く光った。

「これは、大型自動拳銃：デザートイーグルとか、そういうのから発射される弾なんだ。50AE弾って言って、威力はデカいんだけど、ここを貫通するような弾じゃないよ」

「他にも開いてるじゃねえか」

「車は、たいていはドアとかは貫通しちゃうんだ。このパトカーは50AEと7・62ミリ×39弾で撃たれているから、警察の車が装甲していても、ドアはまあ無理だね。9ミリなら分かるけどさ」

「でも車体枠とかは重量を支えるために頑丈に作られてるんす」

「そう。ま、貫通はするかもしれないけど、向こうへ通ったりしないはずなんだ」

と、ドアを開けて、反対側の車体枠の開いた穴を見せる。

「ほーら…射線が通るだろ？つまり2度とも開いちゃってるわけ」

「これ…すごくないすか？」

興奮気味に矢沢が注視する。

「うん。弾はさ、標準だから、どうやって開けたのか…」

「装薬量を増やしてリロードするとか」

「だったら、薬莢が破裂しちゃうね。それか薬室が塞がっちゃうか。威力が桁違いだから」

「ですよねえ」

「おまえらの言うことサッパリ分からねえ」

「分かってくださいよ、警察官なんですから…」

「つまりね、長さん、この弾は普通に…普通っていつでも闇市で手に入れたんだろうけど…発射されていて、普通に当たれば穴は開かないし、向こうへは飛ばないわけ。だけど現に穴が開いて、しかももう一つのピラーまで開いちやつてる。これはおかしいよ、絶対」

「だとすると何だい」

「う〜ん…普通は考えられないけど、発射される直前に弾が加速したとしたか」

「加速？」

矢沢と大延の声がハモる。

「うん、そう。まず拳銃で1発撃つでしょ。で、薬室では普通に発射されるわけ。そこから銃身パレルを通って加速して、銃口を飛び出して、当たる。でも、これじゃ当たっても貫通しないから、銃口を飛び出す直前か直後かで、またさらに加速して、そのエネルギーで突き通ったとしか…」

「2段階で加速する弾、か…」

矢沢がつぶやく。

「それからね、もつと気になるのは…」

二人を手招きして、遺体のカバーをめくる。

顔面を潰された警察官だ。

「50AEで撃つても、射入口：つまり弾の入り口はそんなに穴が大きくないわけ。後ろから出る時は破裂するけど。でも、この遺体は最初から顔が潰れてて、なおかつ後頭部もほとんど破壊されてる。こんなことは普通起きないよ。スイカかペットボトルじゃないんだからさ」

「うくん…」

矢沢はマジマジと見入った。

それほど体格が良いわけではないが、度胸の点では他人に引けをとらない。殺人現場で遺体を見て吐く新人もいるが、矢沢は一度もたじろいだことがなかった。

大延が口を挟んだ。

「じゃあ、なんか新型の武器か、そういうので殺られたってことかい」

「死んだ銀行強盗の武器からすると普通のAKMなんだけど、それじゃ説明つかない」

「はあん……」

大延の眼が光る。

「こりゃあ面倒なことになりそうだ」

「そうだね。オレも心配なんだ」

細野がカバーを戻す時、ふたりは合掌していた。

遺体を初めて検分する場合、頭を下げたり、手を合わせる警察官はいる。

死者に対する礼儀と「犯人を捕まえます」という暗黙の誓いだ。ましてや同じ警察官だ。自然に気持ちが入る。

\*

大延たちは銀行の中へ入った。

そこでは散乱したガラスの破片が床へ飛び散り、それに混じって血もあちこちにあつた。遺体はすでに移送され、場所だけがシールで示されている。

「…なんであんたがここに」

現場を指揮していた刑事が嫌な顔をする。

「よ、内沢うちざわ。元気にしてるかい」

「あんたに気を遣われる筋合いはないね」

公安が首を突っ込んできたことに腹を立てている。矢沢にはその気持ちがあつた。管轄を無視して勝手に上がり込み、手柄を横取りする連中を良く思う者はいない。

しかし、公安が堂々と事件現場へ乗り込むことは異例だ。そもそも自分が公安であることをおおやけにすることすら忌避する。情報戦を生き抜いている者たちにとって、正体を明かさないことはセオリーといつていい。

だが、7課だけは別格だった。

自分から身分を公表し、そのかわりに情報を引き出す。事件そのものには関わらない。必要なことを知れば、あとは放置しておく。捜査は別の者が担当する。

たとえ上に抗議しても「7課には触るな」と言われるだろう。それ以上の説明はない。ゴネれば、なんらかの罰を食らう。少なくとも事件を解決して点を稼ぐような部署ではない。何を調べているのかすら謎だった。

大延が叩き上げの刑事で、腕は良いが出世とは無縁で、捜査第一の人生を送ってきたからこそ辛<sup>かつ</sup>うじて認められているような、得体の知れない部署なのだ。

「そう邪険にするねえ。なんかよう、わかったことだけでも教えてくれや」  
カエルの面に水といった調子で大延が言う。

内沢はため息をつき、

「見るだけだぞ」

と釘を刺した。

「ありがてえ。防犯観てもいいかい」

「どうぞ。証拠品は持つてくなよ」

警備室で大延たちは当日の防犯カメラに映った映像を確認した。

モニターの向こうで強盗犯が射殺されている。

「…なんすか、あの狼男」

矢沢が呆れていた。

「やってることがムチャクチャじゃないすか」

大延は何も言わずモニターを睨んでいた。

狼男が割れたウィンドウからパトカーと撃ち合いをするために飛び出し、その後で戻ってきてゾンビ男を射殺し、アメ車に乗り込むところで映像は終わっていた。

「この車、見つけたか？」

内沢がうなずく。

「ああ。2時間後に四街道市の廃倉庫に乗り捨ててあったのを発見した。盗難車じゃなく、未登録の車だ。密輸品じゃないのか」

「近頃は抜け穴が多いからなあ」

「ここで他の車に乗り継いだんですかね」

「違うな」

大延が即答した。

「この工場から出たらタイヤの跡が残るだろう。車種が分かっちゃう。少し離れたどこかの隠し場所で乗り換えた」

「じゃあ、地下駐車場か、ガレージのある倉庫か」

「だろうな」と内沢。

「遺体ホトケの身元は分かったのかい」

「このミイラのお面を被ったのとゾンビは、プロの連続銀行強盗犯だ。5年前から関東で活動していて、最初は郵便局とかセコい仕事をやっていた。半年ばかり大人しくしていたが、夏見おだぶつで御陀仏おだぶつさ」

「アメ車の運転手は」

「それも見当がついてる。前に一人仲間が捕まって、今、刑務所<sup>ムシヨ</sup>でお勤めしているが、そいつがメンバーを吐いた」

「よく捕まらなかつたな」

「その辺は連中もぬかりない。旧都へ行けば隠れる所はいくらでもある」

『旧都』とは旧東京区の略称だ。

「で、この狼男は？」

「それがまだわからないんだ」

内沢が渋面を作った。

「今度の殺人<sup>コロシ</sup>はみんなこいつのせいなんだが、誰なのか手掛かりがない」

「これ、複製していいかい」

「いいよ」

基盤を操作して円盤を取り出す。

「今どきCD-ROMかい」

「骨董品のあんたにや言われたくないね。」

記録つてのはローテクなほど長持ちするんだ。

石に刻むとかな。紙も燃えなければ何百年ともつ。電子媒体で100年保存できるのがあると思うか？」

「ご高説ありがとうございます」

矢沢に合図し、持ってきた読み取り装置で円盤の情報をコピーする。ハードディスクに記憶された情報はUSBメモリへまたコピーされる。

「通りの防犯は確認したか」

内沢が意味ありげに見た。

「見るだけだ。な？」

「…あらかじめ言っとくが、捏造じゃない」

スマホを取り出す。

「全部じゃないが、本部から転送してもらった記録はこれだ」

色の薄い映像に、上から見下ろしたパトカーが見える。

パトカーは扇状に並べられ、銀行前を取り囲んでいた。

パトカーの後ろには警官が拳銃を構え、油断なく狙っている。

と、いきなり銀行のウィンドウが弾け、銃撃戦が始まった。

白く輝く軌跡が時折閃き、微かな煙とともに撃ち合っているのがわかる。

…が、すぐにパトカーが銃撃を浴びて傾き、その後ろの警官が両腕を投げ出して倒れ始めた。

そして、割れたウィンドウから何か飛び出し、一番前のパトカーのボンネットへ一足飛びで達した。

映像はそこで終わっていた。

「これが本物……？」

矢沢が唸る。

「あり得ないでしょ。見てください、エンジンを撃ち抜いてますよ？ こんなものありっこない。フェイク画像を流したんだ」

「そう思って、向こうも何度も確かめたそうだ」

「……内沢。これ、上に見せるなよ」

大延が怖い顔をする。

「なんで」

「あんたの首が飛ぶぞ」

内沢は反論しようとして、大延の目を見、開き掛けた口を閉じた。

「こいつは、強盗犯の仲間割れだ」

決めつけるようにモニターをトントンと指先で叩く。

「キレた奴が暴れて逃げた。そういうことだ」

「しかし、大延さん……」

「口を挟むな、小僧」

内沢が言った。

「邪魔したな」

軽く手を振って、大延は銀行を後にした。

\*

「どうだい、収穫は」

田崎が外で待っていた。

大延が首を振る。

「つまんねえところに首突っ込んだ。近頃の奴らはすぐキレやがる」

「同感だ」

何か察していたとしても、田崎警部は態度に出さなかった。

「また飲もうぜ、長さん」

「その長さんをやめればな」

気軽に挨拶を交わすと黄色いテープをくぐる。…だが、フォルクスワーゲンへ戻ったとたん、大延は一変した。

さり気なく外に気を配りながらスマホを取り出す。

「…浅井さんかい？悪いね急に。例のことなんだけどさあ…当たり前だわ」  
口調は軽いが目が据わっていた。

「あんたには気の毒だが、一度会って話さないことにや…うん…うん…  
じゃ、例の所で。

…矢沢よう」

スマホを仕舞いながら声を掛ける。

「なんすか」

「内沢にも言ったが、今日見たことは、よそへ漏らすなよ」

「だけど弾が…」

「それだよ」

煙草を取り出して紙マッチで火を点ける。

「そんな事を言った日にゃあ、おめえ、命狙われるぜ」

「誰に」

大延は答えず、煙を吹かす。

矢沢はウィンドウをまた開けた。

「あのねえ、長さ…大延さん」

「なんでえ」

「今日から、この車も禁煙車にしますよ」

「なに？」

「俺、煙苦手なんで」

断固たる態度で言う。

大延はもごもごと口を動かしたが、

「…つたくもう！」

灰皿に煙草を揉み消していた。

## ● パイドパイパー

『新湾岸ヒルトンホテル』は新都心の埋立地の外縁部にある、海を臨む50階建の超高層ビルの中にあつた。最上階を含む41階から上がホテルで、その下はセレブのマンション、高級オフィス街、ショッピングモールとレストラン街で占められている。

夜景に浮かぶ海神ビルは、よくある長方形のそつけない建物ではなく、ニューヨークの摩天楼などで見られる、段重ねの形態をしていた。20世紀初頭の高層建築のような趣きがある。

旧都心に見られたような無味乾燥なビルの羅列ではなく、新都心では個々の建築物が個性を持ち、全体として新都心独自のアイデンティティーを表すような方針に変えられていた。そのせいで奇妙な建物も散見されるが、おおむね住民には好評を博している。

新湾岸ヒルトンホテルを含む海神高層ビルは、だいたいにおいて富裕層や大企業をターゲットにしていたが、そこへひょっこり異物が現れた。

奇谷天狼だ。

鏡のように磨き上げられた大理石のフロアを、薄汚れたスニーカーで踏みながら、のこのこ受付カウンターまで歩いてゆく。

「ヒルトンホテルってここ？」

前置きなしにいきなり言った。

受付嬢は辛うじて表情を崩さなかった。

「そうでございませうが」

「島澄しまずみつてやつに会いに来た」

「アポイントメントはお取りになっていただけますか」

「アポ…なに？」

「面会のご予約は」

「ねーよ。来たらわかるって言われた」

「ご予約がなければホテルへはお通しできませんが…」

「めんどくせえなあ。んじゃ、どうすりゃいい」

「お客様の名前を」

「奇谷天狼」

「ただいまお繋つなぎいたします」

電話する受付嬢。

人狼は、彼女を細い目で眺め、

「美味そうだなあ、あんた…」

舌舐めずりしそうに言った。

隣の受付嬢がはつきりと顔をしかめる。

それを横目で人狼が見て、

「あんたはダメだ。肉が締まってるねえ」

切って捨てた。

受付嬢は睨みつけようとして、男の眼にゾクリとするものを見、反射的に目を逸そらしていた。本能的といつてもいい。

背骨にゾワリ、と寒気が走る。

「…お会いになるそうです。そちらのホテル専用のエレベーターをお使い下

さす」

「おう」

礼も言わず、ぶらりと去って行った。

「なんなの、あの人……」

「さあ……」

二人の受付嬢は嫌悪に眉をひそめたが、自分たちが今夜餌食にならずに済んだ幸運には、全く気づいてなかった。

\*

人狼は、エレベーターに乗ってもジツとしていなかった。

「うひゃくくく、たっけえ！ 凄えなあ」

幼稚園児のようにはしゃいでいる。

強化ガラス張りのエレベーターの周りの景色がみるみるうちに小さくなつてゆく。代わつて夜空が都心の光にも負けず迫り、都会の明かりがシャンデリアのように輝いていた。

「こういう所に住むのも面白えなあ」

(誰が浮浪者なんか泊めるか)と思いつつ、エレベーターボーイが慇懃いんきんに扉を開ける。本来なら門前払いだが、お得意様のたつての願いとあらば、無下むげにするわけにもいかない。

「島澄様のお部屋でございます」

エレベーターの先に廊下が伸びている。

一番手前は小さなロビーになっていて、そこから幾つもドアが向かい合わせに並んでいた。

「で、どこの部屋？」

「この階全部が島澄様御用達ごようたつです」

そんなことも知らないのか、と言いたげなボーイ。

「全部!？」

さすがに人狼が驚く。

「どんだけ金持ってんだよ」

「…来たか。突っ立ってないで来い」

廊下の奥からル・パスが歩いてくる。今日はアルマーニのグリーンのスーツを着こなしていた。革靴はエドワードグリーンだ。何を着ても様になる。

「こつちだ」

「まさかと思うけどよ、騙し討ちってことはねえよなあ?」

のんびりと人狼が続く。

ル・パスが首を振った。

「まさか。そのつもりなら、ここは最悪のチョイスだ」

「なんで」

「死体を片付けるのに金が掛かり過ぎる」

「おまえらのだろ」

ル・パスは肩を竦めた。

奥のドアを開けると別世界が広がっていた。

通称『ダークルーム』と呼ばれるそのフロアは、床から天井まで黒で統一されていて、黒檀の床と壁、天井も光を吸収する特殊塗料で覆われている。

天井から柔らかな光を降り注ぐスポットライトと、同じくスタンドライトだけが光源だ。

歩いていると地獄の底へ墜<sup>お</sup>ちてゆくような錯覚を覚える。

窓は床から天井まで届く全面強化ガラスだった。それらを覆う壁際の自動シャッターでさえ黒い。外の夜景はエレベーターよりもさらに広く、この部屋全体が空中へ浮かんでいるような気分させられる。

そのフロアの奥に、男がいた。

銀色の髪と黒いスーツ。黒革の靴と靴下。黒シャツに赤いネクタイを締めている。顔色は灰色で、三十代半ばに見えるが、どうかするとその倍くらいはありそうな雰囲気にを漂わせている。それでいて妙な精気がヒタヒタと滲み出していた。

サングラスの奥の瞳は見えなかった。

奇妙なのは、首に巻いた銀色のチョーカーだ。

男の両脇には二人の人間がいた。

ひとりは漫画から抜き出たような白人の巨漢。

ボディビルダーのようなふ厚い胸板。一般人の太股よりも太い上腕。首の筋肉はつき過ぎてなだらかな三角形に傾斜しており、太股も女子供の胴体くらい幅がある。

顔つきはイカつく、ゴツゴツした岩を削って人面に仕上げたようだ。

身長は2メートル近い。少なくとも190センチは超えている。

のし掛かるような威圧感があり、普通の人ならそれだけで避けて通る。

もう一人は若い女だった。

狐の面を被っている。

それだけでも妙だが、さらに変なのは、その狐の面が通常とは逆に、目の部分が黒く、顔が真っ赤に塗られていることだ。

首は細く、肌は白い。

膝があらわれる短い裾の赤い晴れ着を身に纏い、赤い足袋を履く。

その手には日本刀が握られている。

赤鞆の三尺三寸で、禍々しい気配を漂わせていた。

そこに立っているだけで危ない雰囲気がある。

人狼は、ピクリと眉を動かしたただけだった。

「あんたが島澄か」

ソファの男はしばらく答えなかった。

真っ直ぐ人狼を見ている。



常人なら、それだけで顔を伏せ、後ずさりする圧力があつた。

だが人狼は平然と見返している。

睨み合いが続いた。

「…島澄という名前もあるが、仲間内では【パイドパイパー】と呼ばれてい  
る…」

唐突に言った。

奇妙な低い金属音が混じる。

「ぱいど…ぱいぱー？」

「『笛吹男』という意味だ」

「けつたいな名前だな」

「ハーメルンの伝説は知っているかね」

「なんだそりゃ」

「昔、ハーメルンの町に、ペスト菌を持ったネズミを退治してくれるという男が来た。男は笛を吹き、ネズミを川へ溺れさせて、町を救った。だが、町は報酬を払うのを拒んだ。男は金の代わりに笛を吹いて町中の子供たちを拐さらい、一緒にどこかへ消えた」

「誘拐とぎ犯ってわけかい。変なお伽話とぎだな」

「事実だ」

「え？」

「そういう記録が残っている」

「で、あんたも笛を吹くってことか」

「私の言葉には皆が従う。例外はない」

「へへへへえ」

人狼がニヤつく。

「俺もか」

「そのとおり」

「俺はあんたの命令なんか聞かねえぜ」

「君はここに居る」

「俺が来てやったんだ。話があんだろ？ さつさと見えよ」

「もう言った」

「なに？」

「私の指示に従ってもらおう。むろん報酬は出す。子供ではないが」

「受けるかどうかは俺が決めるんだ」

「そうだな。だが、君は断れない」

「なんだと」

「退屈なんだろう…?」

サングラスの奥から、ジワリ…と浸透力のある視線が届いた。

人狼のかたわらにいたル・パスが、スツと下がる。

「退屈で退屈で死にそうなんだろう。心臓を喰べても、殺しても、すぐ退屈になる。刺激が必要なんだ、君には…」

「知ったふうじゃねえか」

「君は理解しやすい」

ギリツ…と人狼が齒を剥いた。

「君が欲しいのは金ではない。

女でもない。

権力でもない。

『刺激』、それだけが欲しい。

殺戮さつりくの欲望。

破壊の快感。

一瞬の生を彩いろどる刹那せつなの快樂。

私は、それを提供できる」

「てめえに何ができるってんだ」

「当然ながら、サービスを提供するからには対価を払ってもらおう  
相手を見殺しして話を進める。」

「対価？」

「ある物を取ってきて欲しい」

「それってなんだ」

「君には理解できない物だ」

「俺がバカだつて言いたいのか」

「人間はたいてい愚かだ。君も例外ではない」

「あんたはお偉い賢者様つてわけかい」

パイドパイパーは、薄つすらと笑つた。

「私は己おのれの知性をひけらかすような真似はしない。愚かというなら、君と同レベルかもしれない。それを自覚する程度の賢さはある」

「そうかよ。俺にゃあ、あんたが上から見下ろしているように見えるぜ」

「そう感じるなら、君は最低限の知能を備えているようだな」

「てめ…」

人狼が唸り出した。

「なんなら、この場で殺バラしてもいいんだぜ…」

「不可能だ」

「なんで」

「君は、私を殺すことが出来ない。この場にいる全員が私を殺せない  
はつきりと告げる。」

パイドパイパーは、後ろに控えている二人を指差した。

「彼らは誰だと思う？」

「あんたの仲間」

「違う。私を殺そうとしている」

「…あ？」

人狼が眉をひそめた。

「隙あらば私を殺して自分がの上がろうとしている。驚くことはない。」

【エース】とはそういうものだ。きみもその一人になる」

「こいつもそんなこと言ってたな」

横目でル・パスを睨む。

「なんなんだい、エースってなあ…」

「新しい人類だ」

「けっ」

「気に入らなければ突然変異でもいい」

「どっちにしろイカれてやがる」

「きみは正常なのかね」

「よせよ」

「きみに友達はいないだろう。恋人も、家族も。それでいいんだ。エースはそれぞれが唯一無二の存在であり、ゆえに目障りな者は殺していい。

だから彼らは私を殺そうとする」

巨漢も狐女も微動だにしない。

「俺もそのうちの一人つてか」

「そのとおり」

「じゃあ、今ここであんたを殺<sup>バラ</sup>しても文句はねえんだな」

「死ねば文句は言えない」

薄っすらと笑うパイドパイパー。

「殺していいなら遠慮なく行くぜ」

「どうぞ。殺せるならば」

人狼は、動かなかった。

パイドパイパーも動かない。逃げるそぶりすらしない。

背後の二人も動かない。

ル・パスは息を呑んで四人を見ていた。

(……………っ！？なんだこれはよ…………！)

人狼は歯を喰いしばった。

動かない。

足に根が生えたようにピクリともしない。

指先すら反応しない。

本気で殺す気はなかった。

ちよつと脅かす程度に動くつもりだった。

むろん優しさではなく、パイドパイパーの話の続きに興味があったから

だ。ル・パスの言っていた『バケモノ』の事もある。話を最後まで聞かないでは帰れない。

指の一本くらい引き千切ってもいいとは思っていた。

しかし、命まで獲るつもりはない。

パイドパイパーとの距離は5メートル。

軽くジャンプすれば届く。

それから爪の伸びた手か、牙の生えた口で引き裂く。犬歯も顎も強い。指を噛み切るなど朝飯前だ。

ものの1秒もあれば出来る。

…が、どうしても体が動かなかった。

カタカタ…、と狐女の刀を握る手が震えている。

背後からいきなり斬りつければ一刀両断に出来る近さだ。

巨漢の大槌のような拳も震えている。

(こいつら…)

殺したいのだ。

体が自由になるなら、一挙動でこの男を殺せる…。

それが、できない。

ル・パスだけは離れている。

四人から距離を置いて、危険な時は逃げる準備をしていた。

額に汗を浮かべて。

「……………っ！……………！」

それでも、人狼は、抗あらがおうとした。

凄まじい努力で腕を振り、足を床から引き剥がそうと奮闘する。大粒の汗

が額から顎へ流れ落ちる。

だが、体は１ミリも動かなかった。

——ポン、

パイドパイパーが手を叩いた。

とたんに、三人の呪縛が解ける。

「うっ」と狐女がよろめく。

「ぐ……」と巨漢が呻く。

「……っはあ！ はあ、はあ……」

人狼が喘あえいだ。

「よく頑張った」

平然とパイドパイパーが言う。

「特に人狼ウエアウルフの粘りは見事だった。私が見込んだとおりだ」

「あんたに褒められても嬉しかねえぜ……」

人狼が齒嚙みする。

「どんな手品を使いやがる」

「それは教えられない。もつとも、教えても無駄だがね。断っておくが、私の方はいつでも君たちを殺せる。覚えておいてくれ」

「試してみろよ、オッサン」

「それでは君という人材を失ってしまう。無駄なことだ」

「口ではなんとでも言えるぜ」

「挑発のつもりか？」

パイド。パイ。パーは微笑んだ。

「話題を戻そう。君にある物を取って来てもらいたいという…。」

『それ』は嚴重に保管されていてね。簡単には手に入らない。だから君の助けがいる」

「どこにあるんだ」

「銀行に」

「また銀行強盗かよ。今度はどこをやれって？」

「物部銀行中央区本店」

「……………なにい!？」

物部銀行は、三井住友や三菱と並ぶ巨大銀行の一つだ。

21世紀に入って新規に立ち上げられ、急成長を続けている。その建立の経緯や天文学的な資金をどう調達したかなど、業界では謎とされていた。新都心復興の要でもあり、世界経済に影響を与える国際銀行としても有名だった。

ほぼ国政を牛耳る銀行とも云われており、そこを襲撃するとなると、日本政府と事を構えるに等しい行為になる。

その本店ともなれば、昨今の悪化した日本の治安情勢に鑑み、かんが 嚴重な警備が敷かれているはずだ。夏見の小さな地方銀行を襲うのとはわけが違う。

単に警備員が多く、突破が困難なセキュリティが何重にも設置されているというだけではなく、重要な政治施設の集中する中央区なら重武装化した警察がすぐ近くにいる。たとえ銀行が通報しなかったとしても、何かおかしいと分かれれば警察官が大挙して現れるだろう。

その銀行を襲えという。

「君が船橋で起こした事件のせいで、セキュリティはさらに強化されているだろう。今度はパトロールカーではなく、装甲車や特殊部隊が来るはずだ。やれるかね？」

「誰にも言つてんだよ」

人狼が傲岸不遜ごうがんふそんに言つてのける。

「やるに決まってるじゃねーか」

「武器の調達や人員の確保は」

「当てがある。そいつらに頼む」

「この前の銀行強盗程度なら困難だ」

「なあに、あんな腰抜けどもじゃねえ。危ない真似が三度の飯より好きな連中だ。金さえありゃあ食いついてくる。あんだろ、金？」

ル・パスがアタツシケースをテーブルに置いた。蓋を開いて、札束がぎっしり詰まっているのを見せる。

「手付金として、50万ドル与える。必要なら幾らでも言うがいい。ただし換金はそちらで行ってくれ。まさかと思うが銀行で日本円に換えたりはしないで欲しい。証拠は残したくない」

「そいつも当てがある」

「銀行で得た金はすべて君の物だ」

「はん。ずいぶん気前がいいじゃねえか」

「私が欲している物は、金以上のものだ」

「んじゃあ、そいつを他所へ売れば、もっと高く売れるかもな」

冗談を口にする、パイドパイパーは微かにため息をついた。

「君を買い被っていたかもしれない……」

「んだと？」

「思ったより知性が低い」

「なに言つてやがる。そつちが勝手に話を進めてんだぜ。ありがたく思え

よ」

「転売などしたら、売った相手ともども八つ裂きにする」

まるで太陽が東から昇ると言うがごとく、至極当然に言つた。

穏やかな口調だけに不気味さがいつそう漂った。

人狼が嘲あざけった。

「できるのかよ、あんたに」

「出来る。自分の腕に噛みつけ」

ガブツ！

人狼が、右腕に噛みついた。

「!!!？」

驚愕している。

自分の意志とは関係なく牙を立てていた。犬歯が皮膚を喰い破り、血が流れる。

「嘸み千切れ」

ミリミリミリ…!

「…んんおおおおおおお！」

全力で抗<sup>あらが</sup>う。…が、自分の歯はなおも食い込んでゆく。筋肉の筋がブツブツと切れ、ゆつくりと切断していった。

(…なんだこれは!?)

生まれて初めて戦慄を覚えた。背中に生えている体毛がゾワゾワと逆立つ。

パイドパイパーは本物だ。

ハツタリでものを言っていない。

「もういい。やめろ」

「…んぐあつー!ー!」

自分の腕から口を引き剥がし、人狼は喘いだ。涎と血が唇からこぼれてゆく。

人狼が息を整えている間、他の者は身じろぎもしなかった。よく見知った光景だとも言うように。ル・パスだけは落ち着かなげに足を踏み替える。

「その程度の傷はすぐに治るだろう。君なら」

ほぼ3分の1に達する傷口を見て平然と言う。

「てめえ……なにしやがった…」

「私が君に言う。君は言ったとおりにする。それだけだ」

サングラスの奥の視線が磁石のように人狼の眼を捕える。

「理解できたかな。」

君は、物部銀行中央区本店を襲い、貸金庫に仕舞われている物を強奪する。そして、それを私に届ける。簡単な仕事だ。

それだけでいい」

人狼はズキズキする傷口を舐めた。傷は早くも塞がりつつある。出血は止まっていた。

恐れよりも怒りがある。と同時に、初めて自分と対等の力を持つ者の存在に、ゾクゾクするような歓喜を覚えていた。それは人間ではあり得ない。

「…ようやく分かった。いいぜ。あんたのために取ってきてやろうじゃねえか」

「相互理解できてよかった」

「ただし。今日のこの落とし前は、いずれきつちりつけてやる。それを忘れないな」

パイドパイパーは、薄っすらと笑った。

「いいとも。私を殺せるならそうしたまえ。大歓迎だ。この、パイドパイパーを超える【エース】が存在するなら、これほど嬉しいことはない」

本気とも冗談ともつけかねる言葉。

「連絡はル・パスを通じて行ってくれたまえ。彼がすべて面倒をみる」

「お目付け役つてことか」

「…よろしくな、相棒」

内心（やれやれ）と思いながら、ル・パスは笑みを見せた。

「それと、一つだけ忠告しておく。…いや、朗報とっていいかな。君にとつては」

「なんだい」

「『彼ら』が来る」

「彼ら…？」

「我々の天敵」

「へえ。そんなもんがいるのか。どこの組織だ」

「組織ではない」

「じゃ、どんな人間だ。俺が殺してやる」

「そう願えれば助かる。…だが、まともに戦えば、たぶん君は殺される」

「…なんだと？」

「彼らは狩人<sup>ハンター</sup>だ。我々【エース】を抹殺するマンハンター」

「暗殺者<sup>アサシン</sup>か。そいつら強えのか？」

「強い」

パイドパイパーは断言した。

「この世のものとも思えぬ力を持っている。当然ながら、彼らは人間ではない…」

「へえ：そりや嬉しいね」

人狼が牙を見せた。

「前からそういう奴を喰つてみたかつたんだ」

「君が動けば、彼らは必ずやつて来る。戦うのは君の自由だ。が、その前に、私の物を確実に届けてくれ。そのあとは好きにしてい」

「なるほど。あんたは出会いたくないわけだ、そいつらに。だから俺を使つて楽をしようつて魂胆か」

「できるかね」

「当たり前だ。で、そいつら、なんてんだ？」

「特に名称があるわけではない。我々の間では【エースキラー】という呼び名で通っている。もつともそれは、不特定多数の者たちのことを指すだけで、個々人のことを言っているわけではない」

「【エースキラー】……………」

人狼はその言葉を口の中で転がした。

それから、ニイツと笑った。

「気に入ったぜ。そういうことなら、俺がやらなくちやなあ。あんたらがビ  
びるような敵がいるなんざ最高じゃねえか」

「期待している、ウエアウルフ人狼」

「おおよ。任せておけよ、パイドパイパー」

「その名もいいが、どちらかというと、【エリック】と呼んでくれた方がい  
い」

「【エリック】…?」

「ああ」

「そいつもあだ名なのか」

「好きに解釈してくれたまえ」

「ふうん。妙なこだわりがあるんだな…いいぜ、エリックさんよ。その話受けた。金はもつと要るから、約束を破るんじゃないぞ」

「約束は守る」

「いつかあんたを殺してやるからなあ。楽しみに待ってるや」

「楽しみにしている」

人狼が背を向け、ダークルームから出て行った。ル・パスがそのあとを追う。

\*

「…よいのですか、あの者に任せて」

狐女が言った。仮面の奥のくぐもった声で。

「彼は期待どおりにやる」

パイドパイパーは揺るがなかった。

「それに、たとえ期待どおりではなかったとしても、『彼ら』を炙り出せる」

「釣り餌ってわけか……」

強い訛りのある日本語で巨漢がボソリと言った。

「あの男、生きて帰れません」

「彼もそれを望んでいない」

サングラスの奥の冷たい眼。

「人狼にとって最高に価値あるものとは、強敵と戦って死ぬことだ。それ以上  
上の刺激は存在しない。君なら分かるだろう」

「……………」

「我々もまた命を惜しんではない。

我々は世界を揺るがせる者だ。

永遠の命も、歴史に残る偉業も、我々の大義には些細な事に過ぎない。

これは、始まりの一手なのだ……」

△本編に続く▽